令和元年度・2年度

石見銀山遺跡

関連講座記録集

島根県教育委員会

令和３年３月

令和元年度・二年度　石見銀山遺跡関連講座記録集

島根県教育委員会

令和三年三月

開催概要

島根県教育委員会では、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の価値について理解を深めていただくこと、最新の調査研究成果を広く情報発信することを目的に、「石見銀山遺跡関連講座」等を開催しています。本事業の概要は以下のとおりです。

令和元年度　石見銀山遺跡関連講座

［広島会場］

「世界史の中の石見銀」

１）日　時　　令和元年９月21日（土）13：30～15：30
２）場　所　　中国新聞ホール（広島県広島市中区土橋町7-1）
３）内　容　　解説「石見銀山遺跡とその文化的景観」
　　講師：遠藤浩巳氏（大田市教育委員会石見銀山課長）
　　講演「世界史の中の石見銀」
　　講師：岡美穂子氏（東京大学大学院情報学環・史料編纂所兼任准教授）
４）主　催　　島根県教育委員会
５）共　催　　大田市教育委員会、中国新聞社

［東京会場］

「世界史の中の石見銀」

１）日　時　　令和元年９月23日（月・祝）13：30～15：30
２）場　所　　東京証券会館ホール（東京都中央区日本橋茅場町1-5-8）
３）内　容　　解説「石見銀山遺跡とその文化的景観」
　　講師：遠藤浩巳氏（大田市教育委員会石見銀山課長）
　　講演「世界史の中の石見銀」
　　講師：岡美穂子氏（東京大学大学院情報学環・史料編纂所兼任准教授）
４）主　催　　島根県教育委員会
５）共　催　　大田市教育委員会、読売・日本テレビ文化センター

令和２年度　石見銀山遺跡関連講座

［オンライン講座］

「毛利元就が結ぶ石見銀山と嚴島神社」

１）収　録　　令和２年10月27日（火）　中国新聞社（広島県広島市中区土橋町7-1）
２）配　信　　受講者限定　中国新聞デジタル専用サイト
　　令和２年12月１日（火）～ 12月15日（火）
　　一般公開　　島根県公式YouTubeしまねっこCH
　　令和３年２月15日（月）～
３）内　容　　講演「毛利元就が結ぶ石見銀山と嚴島神社」
　　第１部「石見銀山と毛利氏」約24分、第２部「嚴島神社と石見銀山」約20分、第３部「豊臣政権下の石見銀山」約20分
　　講師：秋山伸隆氏（県立広島大学宮島学センター長）
　　対談「戦国大名毛利氏と石見銀山」約20分
　　対談者：秋山伸隆氏
　　伊藤大貴（島根県教育委員会文化財課世界遺産室研究員）
４）主　催　　島根県教育委員会
５）共　催　　大田市教育委員会、中国新聞社

目　　次

令和元年度　石見銀山遺跡関連講座

広島会場

講演「世界史の中の石見銀」～石見銀山遺跡とその文化的景観～

東京大学大学院情報学環・史料編纂所兼任准教授　岡　美穂子 氏……02

東京会場

講演「世界史の中の石見銀」～石見銀山遺跡とその文化的景観～（抜粋）

東京大学大学院情報学環・史料編纂所兼任准教授　岡　美穂子 氏……13

令和２年度　石見銀山遺跡関連講座

オンライン講座

講演「毛利元就が結ぶ石見銀山と厳島神社」

第１部　石見銀山と毛利氏

第２部　厳島神社と石見銀山

第３部　豊臣政権下の石見銀山

県立広島大学宮島学センター長　秋山　伸隆 氏……32

対談「戦国大名毛利氏と石見銀山」

県立広島大学宮島学センター長　秋山　伸隆 氏……41

島根県教育委員会文化財課世界遺産室研究員　伊藤　大貴

令和元年度 石見銀山遺跡

関連講座 1

世界史の中の石見銀

～石見銀山遺跡とその文化的景観～

【広島会場】

日　時　令和元年９月21日（土）
　　13：30～15：30

場　所　中国新聞ホール（広島県広島市中区土橋町7-1）

【東京会場】

日　時　令和元年９月23日（月・祝）
　　13：30～15：30

場　所　東京証券会館ホール（東京都中央区日本橋茅場町1-5-8）

講座

世界史の中の石見銀 ～世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観～

東京大学大学院情報学環（史料編纂所兼任）准教授 **岡 美穂子** 氏

広島会場

本日の講師を務めます岡美穂子です。現在は、東京大学の情報学環という、東京大学の中の様々な部局から、学際的な研究に関心のある研究者が集まる大学院に所属していますが、本来の所属は史料編纂所という日本史の研究所です。私の両親は岡山県の出身で、中国地方には昔から非常に馴染みがあり、広島弁を聞くと岡山弁と似ており、とても懐かしく感じます。

本日の講座の主催である島根県との関係ですが、京都大学での大学院時代に遡ります。私が南欧語史料を使った日本史の研究を本格的に志すようになった頃、ちょうど石見銀山をユネスコの世界遺産にするための運動が大変活発に行われていました。その中で石見銀山歴史文献調査団という、学術的に石見銀山の歴史的な価値を考証する研究グループが組まれていました。当時、日本中世史の、特に商業史や女性史の研究で非常に有名な脇田晴子先生がそのグループを率いておられて、私も大学院生ながら、その文献調査団の中で、石見銀山に関わるヨーロッパの文献を翻訳する仕事をさせていただきました。その中で、自分の博士論文の研究テーマも見つかりました。

その研究は、日本の銀がどういう形で海外に流れていたのか、主に投資や融資について、欧文で書かれた契約の証文から研究するというものです。その結果、ポルトガル人が日本で行っていたと思われてきた南蛮貿易は、実はその資本の主体の大半は、日本人のものであったことが分かってきました。つまり日本人の大名や商人が投資した銀によって、貿易が成立していたと言えます。今日はそんな風に、島根県や石見も巻き込まれた世界史上の大きな銀の動きについてお話ししたいと思います。

16世紀は、銀の世紀と言われています。その頃、世界各地で銀鉱が開発され、日本の石見銀山でも当時世界の３分の１の量の銀が生産されていたと言われています。石見銀山が発見された年は、1526年頃と言われてきましたが、最近では、1527年に博多商人の神屋寿禎が銀鉱を発見したのが正しいと言われています。だいたい同じくらいの時期に、太平洋を隔てて日本の向かい側にありますメキシコで、非常に多くの銀山の開発が始まりました。世界的に有名な銀鉱の開発は、凡そ16世紀の前半に集中しています。すでに世界遺産になっているところでは、サカテカス銀山、グアナフアト銀山が非常に有名ですし、メキシコではないのですが、現在のボリビア（旧スペイン領ペルー）のポトシ銀山も、よく知られています。

サカテカスやグアナフアトより少しマイナーなのですが、メキシコの首都メキシコシティからそう遠くないところに、タスコという銀山町があります。ここの銀山は、サカテカスやグアナフアトより少し早めの、1534年頃に開発が始まりました。スペイン人がちょうどその頃にメキシコを征服したのですが、スペイン人が到来する前から、メキシコのインディオたちは、山に銀鉱があることは知っていました。ただ、製錬技術に乏しかったので、銀鉱から銀を抽出して大規模に活用するということは行われていませんでした。大規模なマンパワーと技術を使った銀山開発は、スペイン人がやってきてから始まったのです。

メキシコにはいわゆる銀山街道と呼ばれる道があります。この銀山街道上にあるサカテカス銀山、グアナフアト銀山は、いずれも石見銀山よりも早い年代にユネスコの世界遺産に指定されました。

メキシコの主要な街道は、すべて首都のメキシコシティにつながっています。銀が運ばれた街道は、海沿いではなく山沿いのルートで、その途中にグアナフアトとサカテカスの非常に大きな銀山があります。

今、メキシコの話をしますのは、ちょうど先月メキシコの銀山に調査に行ってきたからなのですが、日本の銀の流通と新大陸の銀の流通には、大きな関係があります。

次の地図（28頁・スライド１）は、よく知られている江戸時代の初頭に仙台の伊達政宗がヨーロッパに送った支倉常長等の「慶長遣欧使節」の旅行図です。

この使節は、仙台を出発して、まず北アメリカに接岸します。実はこの航路というのは距離のわりには、非常に早く渡ることができる航路です。三陸沖に、太平洋を東西に流れている北太平洋還流と黒潮が、ちょうど重なる海域があります。黒潮から北太平洋還流に乗り継ぐと、太平洋を３週間程度で渡ることができるのです。つまり、太平洋を隔ててアメリカ大陸と日本はかなり近かったと言えます。そしてこの支倉使節は、やはりこの航路を使ってメキシコ到着を目指し、メキシコの太平洋側の港であるアカプルコという港に入港しました。メキシコ国内での慶長遣欧使節の行程（28頁・スライド２）を見ますと、アカプルコとメキシコシティは、地図で見ると結構近いのですが、今でも飛行機で１時間くらいかかります。かなりの山岳地帯を陸路で延々と歩いたようです。

先ほど言ったように、全ての街道はメキシコシティに通じています。アカプルコからもメキシコシティへ続く街道があります。タスコはその街道の途中にある銀山の町なのです。

タスコでは多くの銀の坑道が掘られました。タスコ銀山には、石見銀山のように、坑道の中に入って見学することができる場所があります。元々修道院だったところがホテルになっていて、そのホテルの改築工事の際に、坑道の入り口が見つかったそうです。スペイン人が掘ったものではなくて、インディオが使っていたものです。スペイン人の入植後すぐにカトリックの修道院が上に建てられたので、その銀鉱が掘りつくされなかったようです。今でも坑道を下っていくと、銀をはじめ、色々な資源の鉱脈を見ることができます。タスコの町は山に囲まれていて、その山のほとんどに銀鉱がありました。

タスコ銀山で採れる直径20cmほどの銀鉱石を持ってみました。非常に重たいです。

「タスコ銀山の鉱石」（タスコ銀山）著者撮影

内部の、坑道の部分では、茶色の銅や黒い銀を見ることが出来ます。先ほど申し上げたように、今入ることができるのは、スペイン人が到着する前のインディオたちが発掘していた坑道で、約500年前のものがそのまま残されています。スペイン人に掘り尽くされなかったために、このように非常に豊かな金属鉱脈を見ることができます。タスコの坑道見学では、階段を使って下に降りるようになっています。もちろんこの階段は、見学用に増設されたものです。

「タスコ鉱山の坑道」（タスコ銀山）筆者撮影

ライトアップされた銀鉱を見ると、この坑道には非常に豊かな銀鉱が残されていることが分かります。このタスコ銀山の坑道は、観光用

に、つい最近整備されました。坑道内のツアーでは、メキシコ人の男性がインディオの格好をして、銀山の開発の歴史を坑道の中で解説してくれます。そして、時期的に夏休みだったからなのか、いつもいるのか分からないのですが、子どものインディオも採掘夫として登場します。実際にメキシコの銀山では子どもが銀掘鉱夫として多く動員されていました。それを再現するためなのでしょうか、メキシコ人の子どもがここに現れて、鉱石を入れたカゴを背負って上に登っていくのです。

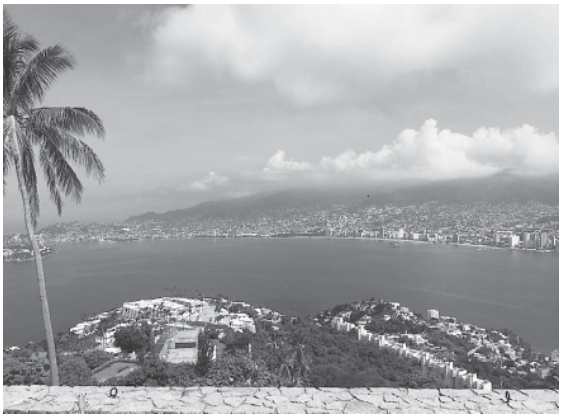
タスコは銀山に囲まれた町で、山肌にも町が発展しています。このタスコの町には、支倉使節も立ち寄っているのですが、おそらく銀の採掘や精錬技術の見学のためであったのではないかと考えられます。

「タスコの全景」（タスコ）筆者撮影

16世紀はサカテカスやグアナフアトの鉱山が開発の中心でした。タスコの大規模な開発は、18世紀になってフランスの鉱山会社が入ってきてから始まります。タスコの町の中心には、サンタ・プリスカ教会という立派な教会がありますが、その教会の中には純銀製の聖母マリア像というものも置かれています。

「サンタ・プリスカ教会」（タスコ）筆者撮影

メキシコで産出・精錬された銀は、新大陸だけではなく、ヨーロッパやアジアにも大量に輸送されました。アジアでは、フィリピン諸島をスペイン人が征服していたので、太平洋をガレオン船という大型の帆船がアカプルコからフィリピンのマニラへと定期的に航行していました。港町アカプルコは湾（アカプルコ湾）に面した町なのですが、湾の入り口には要塞が築かれて、敵の侵入を防いでいました。海に面して多くの要塞があるのですが、サンディエゴ要塞という最も大きな要塞は、現在は歴史博物館として利用されています。形は函館の五稜郭に似ています。



「アカプルコ湾と市街」（アカプルコ）筆者撮影

実際に行ってみて驚いたのですが、アカプルコには大きな船着き場がありません。これほど世界的に有名な国際港ですが、大きな船は直接着岸できないのです。その代わりに砂浜がありました。ガレオン船のような大型の船舶は、この砂浜よりもっと沖のほうに逗留して、荷物は小舟に移し替えて浜まで運んでいたのです。

17世紀のアカプルコを描いた地図にも大きな港はほとんどありません。大型船は沖に停泊し、小さな波止場まで、小船で荷物を運んでいます。初期のアカプルコはかなり小さな集落で、交易関係以外の建物は僅かでした。

スペイン人たちはガレオン船でメキシコからフィリピンへと太平洋を渡っていました。そしてフィリピンから日本へも来航することがありました。

アカプルコの歴史博物館では、銀製品も展示されていました。船の形のカトリックのミサの用具や、新大陸の銀を使った銀貨です。新大陸銀を使った銀貨は純度が高く、16世紀の世界では、現在のドルのような安定した価値を持つものでした。やはり高度な精錬技術に拠るものだと思います。17世紀以降20世紀の初頭くらいまで、この銀貨を基準にすべての国際取引が行われていたくらいです。

この新大陸銀は、太平洋を通じてアジアにも運ばれてきました。その代わりに中国産の陶磁器や工芸品、生糸、絹織物、アジアの香辛料などが新大陸へと運ばれて行きました。実は16～17世紀に日本や中国から新大陸へ渡ったと思われる工芸品は非常に大量にあります。アジア製品が新大陸に渡っていたことは、わりと最近の研究で知られるようになってきました。私も最初は半信半疑だったのですが、本当に大量の中国の陶磁器が中南米に残っていて、スペイン人たちが行っていた世界貿易の規模というのが、それだけでも測り知ることができます。中国産のいわゆる「青花」と呼ばれるこの青と白の陶磁器以外にも、雑器を含む多様な陶磁器が新大陸に運ばれました。東南アジアからは香辛料も新大陸に運ばれました。

実はこういったモノ以外に、人身売買というか、奴隷貿易に近いことも行われていて、その詳細は、私の共著（ルシオ・デ・ソウザ・岡美穂子『大航海時代の日本人奴隷』でご覧いただけます。アメリカ大陸には、日本、フィリピン、東南アジアそしてインドなどからもこの太平洋を渡って多くの人が運ばれていました。日本から一番遠いところでは、16世紀の末、1596年に、アルゼンチンに日本人がいたことが知られています。こういう話は、研究が進んだ現在でも、教科書には書かれません。普通は知らないので、皆さん、半信半疑に思われると思いますが、歴史資料から、中南米の色々な町に16世紀末には日本人がいたことが確認されています。

黒潮や太平洋還流は流れが速いため、太平洋は比較的短い期間で渡ることができます。スペイン人のガレオン船は、フィリピン諸島を出港して三陸沖あたりまで北上したら、太平洋還流に乗って３週間程度で北米まで渡ることができます。ですので、16世紀の新大陸に、日本人や中国人がいた話をすると、皆さん意外に思われると思いますが、実際には航海日数で考えると、結構近いのです。

私の最近の研究で、キリスト教の宣教師が国内を移動する際に、どのような経路をどういう手段でたどっていたのか調べてみました。主に九州から畿内に移動する際のことですが、ほとんどの場合、瀬戸内航路を使っています。その頃の瀬戸内海には、海賊、水軍がたくさんいました。そのために結局、豊後大友領の臼杵という港を出発してから堺まで２ヶ月ぐらいかかる時があるのです。色々な港に拘留されたり海賊を避けるために通常とは異なる海路を通ったり、結局、大分から瀬戸内海を通って堺まで行くのに、２ヶ月もかかるようなことがあったようです。それに比べて、広大な太平洋を３週間で渡ることができるというのは、かなり意外です。実際の距離感はかなり近いといえます。

メキシコの銀山の町として最も有名なグアナフアトの様子をご紹介します。19世紀のグアナフアトの写真を見ますと、まだ今ほど大きな町ではありません。先ほどご紹介した銀の街道、メキシコの銀の街道は、中央部の山脈に沿ってできた山道ですが、メキシコシティのほうに伸びています。グアナフアトの博物館では、銀山に関する様々な展示がありました。例えば、銀の製錬に使う器具です。一つ一つの器具が非常に大きく、メキシコで産出される銀がいかに豊富であるのか、器具の大きさからも分かります。

昔のグアナフアトは銀の精錬には水車が使われていました。水車を動かすには川の水が必要でした。グアナフアトの都市の周辺の山には、大体銀の鉱脈があり、現在も銀が掘られていて、主にカナダの銀山会社が銀山を開発しています。最も深いものですと、縦穴の深さが500m程度です。

「聖カエタン教会から見た銀山の山並み」（グアナフアト）筆者撮影

この銀山の中で、17世紀に開発が始まって現在でも銀が掘られているバレンシアーナという銀山は、坑道に入って中を見ることができます。

メキシコでは銀の掘り手には、８歳以上の子どもが非常に多く動員されていました。20世紀初頭あたりに撮影された写真を見ると、子どもがたくさん働いているのが見えます。おそらく貧しい家庭の子どもたちでしょう。鉱山労働自体非常に過酷ですし、特有の病気もあります。鉱山事故で亡くなる可能性もあります。このように８歳から10歳の子どもたちが動員されて、人によっては非常に短い人生を送っていた、ということも考えなければなりません。人類の歴史の遺産というのは、必ずしも美しいとか技術的に優れたものだけではなく、文明や産業の発達の中で命を犠牲にした人たちがいることも、記憶していくべきものだと思います。つまり世界遺産というのは、人類の文明や科学技術の発達と一緒に、そこで生まれる負の側面を含めて、世界史の重さを感じていくべき場所なのではないかと思います。ここ広島市にある原爆ドームも、そういった点では決して人類の美しい思い出ではないのですが、私たちが決して忘れてはいけない「歴史」を伝えるものとしての世界遺産としての価値であると思っています。

別の鉱山労働の写真を見ると、男の人たちがほとんど裸でいます。メキシコの坑道の中は非常に暑いので、ほとんど裸で働かざるを得ないのです。坑道の天井の高さはかなり高いのですが、それだけ銀鉱が多くあるということです。メキシコは現代でも、銀の産出量においては世界一でありますから、その鉱脈の豊かさには圧倒されるばかりです。

グアナフアト鉱山では、何度も鉱山事故がありました。鉱山事故を描いた絵（「グアナフアトの鉱山事故を描いた図」（グアナフアト州立博物館アロンディガ・デ・グラナディータス所蔵）EXVOTO MINERO, MINERAL DE CATA (MUSEO DE LA ALHONDIGA)」を見ると、事故現場に聖母マリアが出現しています。事故に巻き込まれて助かった人たちがいました。助けられたことを感謝するために、聖母マリアの出現の絵が描かれたのです。その鉱山事故に巻き込まれた人たちの名前が書かれています。亡くなった人もいますから、事故を記憶にとどめ、供養するために、こういう絵が描かれたともいえます。この絵からは、単なる事故の様子だけではなく、19世紀のメキシコの銀山での採

掘技術を知ることができます。例えば、建物の２階で馬が何かを曳いているように見えます。遠近法の問題で、実際には２階ではなく、地上だと思います。馬は何を曳いているのでしょうか。これは19世紀のアマルガムの技術を表しています。アマルガムは銀の精錬技術です。採掘した銀鉱石を細かく砕いて水銀と一緒に混ぜることで、不純物を取り除くことができます。

この絵を見た時に、銀山絵巻（28頁・スライド３）を思い出しましたので、少し比べてみましょう。

近代化以前の銀山の坑道は、人がひとり、かがんで入れるかどうか、という感じです。非常に広いメインの坑道以外には、このように非常に狭い空間で銀鉱を掘って銀を取り出していました。その様子は日本もメキシコも共通しています。こういった鉱山事故に関する絵画を見るだけでも、当時の鉱山の状況を知ることができます。

蒸気や電気が一般的ではない時代、すべての作業は人力か、動物、自然の力を使って行われていました。先ほど申し上げたように、ここでは馬が水車のようなものを曳いています。その上には滑車があって、ここで砕いた銀鉱石を水銀と混ぜる作業が行われています。この作業はアマルガムと呼ばれていました。まず人の手で銀鉱石を細かく砕き、銀の含有量の高い部分を選別します。次に水車を利用して鉱石をさらに粉砕し、銀鉱石の粉をふるいにかけて塩水と水銀を加えると、非常に純度の高い銀を取り出すことができます。19世紀の終わり頃でもこういう形で行われていますので、つい最近まで使われていた技術であると言えるでしょう。

先ほど、島根県大田市教育委員会より大森銀山の五百羅漢は、銀山の採掘現場で亡くなった鉱夫の鎮魂のために作られたものであるという説明がありました。やはり日本の銀山同様にメキシコの銀山でも多くの人が亡くなりました。ですので、彼らのための教会も建てられています。

「羅漢寺五百羅漢」（大田市大森町）

「聖カエタン教会」（グアナフアト）筆者撮影

教会の内部は大変豪華なゴシック様式ですが、建てられた目的を考えると、単に美しいだけでは済ませることができないと思います。

坑道の中にも祠があって、ここには聖カエタンと呼ばれる聖人が祀られています。この聖カエタンという聖人は鉱山の守護聖人であると考えられていて、鉱夫たちの信仰を集めていたようです。そういった意味でも、世界遺産の銀山は世界史の中の経済的な重要性だけではなく、文明・科学技術の進歩と同時にそれに関わって多くの人が命を落としたという事実を考える場所でもあると言えます。こういった銀山での信仰というのは、それを体現していると思います。

さて、今から本題の方に入ります。なぜ16世紀後半に、世界中で銀山開発が進んだのでしょうか。偶然にも、スペイン王室の支援を受けたイタリア人のコロンブスがアメリカ大陸に到着

し、その後スペイン人の探検隊がやってきた時に、そこに非常に多くの銀鉱があることに気づきました。ほとんど同じ時期に、世界貿易が展開されるようになり、ポルトガル人やスペイン人が大洋を渡って商業ネットワークがグローバルに広がりました。その中で共通貨幣としての銀の有益性が高まります。現在は、銀はそれほど高価なものではありませんが、当時は貿易貨幣として、そして一定の価値をすべての地域の人が見いだすことができる金属として着目されたわけです。

なぜ、銀の爆発的な流通が16世紀後半に始まったのかというと、ちょうどヨーロッパ人が中国との大規模な交易を始めたからなのです。中国ではどこよりも銀が価値を持ち、なおかつ必要とされていました。中国との交易で得られる商品の種類は無限にあります。有名なものは生糸、絹織物ですが、それ以外にも陶磁器、茶、工芸品などがありました。また、ヨーロッパ人が到来する以前から、もともと中国は東南アジアや北東アジアと交易をしていますから、東南アジア産の香辛料や北東アジア産の毛皮などを、明朝が外国との貿易のために開けた広州とマカオで入手することができました。ヨーロッパや日本が求めるような中国産商品の対価として、銀の役割が大きくなっていったのです。

中国からモノを買いたいと思えば、中国人が望むものを用意しなければなりません。それが銀でした。中国で銀が重用された背景には、明朝の通貨政策があります。日本にも輸入されていたような銅銭は明の皇帝たちがたくさん発行しております。しかし、社会経済が豊かになると、徐々に物の値段が高くなります。銅銭は小規模な小売で使われますが、中国沿岸部の都市社会が発展して、田舎から都市へ大量にモノが運ばれるようになると、商取引の規模も大きくなります。そこで銅銭を使っていたのでは、大量になってしまいます。大規模取引では、銅銭に代わる通貨として、銀の重要性が高くなっていきました。これが15世紀以降のことです。ただ中国では銀貨はなく、基本的には秤量貨幣でした。

さらには中国では1580年代に税金を銀で収める義務が定められます（一条鞭法（いちじょうべんぽう））。中国の通貨が銀に替わり、中国産のモノが世界的に求められるようになることで、世界中の銀を産出する地域が非常に重要になったのです。

明朝は銀を重視した経済政策を採ったのですが、16世紀の末になると、中国の北方で女真族、後に清朝を建てることになる満州族の一部が、中国の覇権を目指して南下してきました。ちょうど豊臣秀吉がやはり最終的には中華の征服を目指して朝鮮に渡った時期です。中華王朝からすると蛮夷がこぞって侵攻してきたイメージになります。その戦いのためには、大量の兵士が必要ですが、明朝の兵士たちの給与は銀で支払うことになっていました。

主に中国の社会システムの変容を理由として、世界中の銀を算出する地域が影響を受けることになりました。

16世紀末の中国での銀の需要の拡大が、新大陸の銀鉱を豊富に持つスペイン帝国、ひいては西ヨーロッパの世界市場の覇権の要因になったと言われています。16世紀の中国での銀の需要と、新大陸での銀の大量生産という二つの現象が偶然もあって重なることで、世界経済のグローバル化というものが始まりました。もしこの二つの現象が重ならなければ、西欧世界が16世紀以降21世紀までの世界の支配者になりえなかったかもしれません。その意味では、中国が必要とするものを供給する地域が世界経済の中心となる傾向というのは、16世紀以降も現代まで続いています。例えば、中国の景気が悪くなると他の地域の経済も影響を受ける、という状況は、現在だけではなくて実は16世紀以降ずっと続いている現象であるとも言えます。

「世界史の中の石見銀山」というテーマですので、世界の話はここで止めておきまして、16世紀の日本、石見銀山と世界史の関係に入って

いきましょう。石見銀山は16世紀、世界の３分の１の量の銀を生産したと言われています。そして、その大半は日本国内では流通せずに、海外へと流出していきました。それでも実は日本銀の日本国内での流通経路や、海外への流通経路は漠然としていて、まだそれほどその流出に至るサークルの解明は進んでいません。石見の地理性を考えますと、日本海で九州の博多と、そして瀬戸内海を通じて堺という、中世の日本の重要な二つの港町と繋がっています。そして博多は長崎とも強い繋がりがありますので、交易のネットワークを考えると、漠然と石見の銀がどうやって日本から流出していたのか、イメージできます。

博多や長崎、堺以外にも、実は石見の港、先ほど紹介があった温泉津（ゆのつ）や沖泊（おきどまり）だと思われますが、直接ポルトガル人が来航していた情報を示す史料が見つかりました。８月24日に山陰中央新報（25～27頁・資料２）でも大きく取り上げられたのですが、スペインの国立歴史文書館所蔵の史料の中に、石見という地域に関する付加情報として、「この地にはポルトガル人が交易にやって来る」と書かれています。温泉津の沖泊はじめ、島根県には多くの良港があり、温泉津だけではなくて、浜田などが日本国内の交易でも重要な港でした。

上空から見た温泉津（ゆのつ）港（大田市温泉津町）

こちらがその史料（19～22頁・資料１）ですが、当時の日本の67カ国の国名が、このように非常に達筆な字で書かれています。また、ローマ字で読み方も紹介されていますが、それらの地域についての付加情報はそれほど多くはありません。理由は分からないのですが、このページですと、石見国と安芸国についてのみ、付加情報が記されています。

その地理情報は史料１（20頁）の地図と一緒に綴じられています。

『海東諸国紀（かいとうしょこくき）』（東京大学史料編纂所所蔵）と呼ばれる15世紀に朝鮮で作成された地図がありますが、それに少し似ている気がします。このタイプの地図は、歴史的には「行基型地図」と呼ばれます。地図研究者の間では、行基というお坊さんが最初に見本を作った地図の類型として知られています。

先ほどのスペインの国立歴史文書館に残っている67カ国の国名情報と一緒に記されている史料１の地図を描いたのはおそらく日本人でしょう。先ほど紹介した国名の史料と一緒にこの地図が綴じられており、凡その日本の分国の様子が分かります。ただし、北海道、つまり蝦夷地は描かれていません。蝦夷地つまり北海道に関する情報は、当時のヨーロッパ最先端のポルトガルの地図では、1561年に製作されたものの中に、蝦夷地に大変似た形状のものが現れますが、16世紀末の日本人にとっての「日本」の地図には、存在が認識されていたとしても、蝦夷は含まれないのです。

この「石見」と書かれた部分を拡大したものが史料３（22頁）です。この史料の背景について少し詳しく説明しましょう。この史料自体は、随分前から知られていて、日本でも研究に使われてきたのですが、少し分析が十分ではなかったようです。具体的にはフィリピンに渡航した日本人がマニラのスペイン人の総督府にもたらした情報です。1587年当時、ルソン島を中心に、フィリピン諸島の大半を領地化していました。そこへ1587年に日本人の商人たちが到来します。当時マニラのカトリック教会の代表であったフィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザールという人物に面会します。このドミンゴ・デ・サラザールが彼らから聞き取った日本の情

報がここにまとめられていて、日本人自身が提出した資料も綴じられることになりました。

先ほど言いましたように、この史料自体が新発見ということではありません。私より前にも、この史料に書かれる情報や作成された背景について分析した研究者が数人います。そもそも史料自体は、1939年に、フランス語で書かれた論文（出版地は日本）の中で紹介されています。その論文の執筆者は中村拓（ひろし）という有名な日本の地理学者、地図学者です。中村氏は医学博士で、本業は生化学者でしたから、趣味が昂じて地図の歴史の研究を本格的におこなっていたようです。中村氏はフランス語に堪能で、スペイン語もできたようですが、古文書を読むほどというわけではなかったので、この地図と分国名が記された資料にいち早く目をつけたものの、スペイン語の部分は完全には読み解くことはできなかったようです。石見に関するスペイン語の付加情報には、“Ay mucha plata, Aqui van los portugueses” と書かれています。“（H）Ay mucha plata” は「銀が豊富にある」という意味で、「plata」が「銀」です。「mucha」は「豊富な、たくさん」という意味なのですが、中村氏は「ここに銀がある」としか訳していません。さらには、その下の部分に「ポルトガル人がここにやって来る」と書かれているのですが、1939年の時点では、中村氏は読み取っていませんでした。

これまでの日本人の研究者は、基本的に活字になったこの中村論文を参考に研究してきたので、「そこにポルトガル人が来る」、という情報があることに気づかなかったのです。

私は石見銀山のことをかなり長い間研究していて、石見に関して「銀がたくさんある」と明確に記されていることだけでも珍しいので、しっかり原史料を読んでみたいと思い、史料を入手しました。そうしたところで、この「ここにはポルトガル人が来航する」という記述を見つけることができ、早々、山陰中央新報に取り上げていただいたわけです。

「ポルトガル人は長崎に来ていた」と普通は日本史の教科書で教えられます。南蛮屏風に描かれるようなポルトガル人の黒船は、1571年以降、確かにほとんどが長崎に入港しています。16世紀中頃から20世紀の終わりまで、ポルトガル人は香港の近くのマカオというところに拠点を置いておりました。日本にやって来るポルトガル人は、必ずしも大型の西洋船に乗っていたわけではなく、いわゆるジャンクと呼ばれる中国船に乗って来る人も結構いました。簡単に言いますと、ポルトガル王室から日本貿易の権利を与えられたカピタン・モールと呼ばれる艦長が乗船した西洋の大型船でおこなわれる貿易を公貿易、それ以外のポルトガル人が銘々自分の船でやってきて行う貿易は私貿易であったと考えられます。このようなジャンク船による交易はほとんど記録に残らないので、もしかしたら石見だけではなく、日本の他の港で、南蛮貿易とは関係のないようなところにも、入港していた可能性はあると思います。

石見の港には、銀を求めてポルトガル人が直接来航したという史料を見出すことができましたが、この事実を裏づけていくためには、もう少し他の史料や、発掘調査で出てくるような中国産の商品などの分析が進む必要があると考えます。

史料４（22頁）、石見以外にもう一つ付加情報がある安芸についてですが、他の備後や周防に関しては、その地名以外のことは書かれていません。その情報には、「当国の王は上述の銀をすべて享受する」と書かれています。「上述の」というのは、「石見」を指しています。つまり、安芸の国主が石見の銀をすべて得ているという意味です。当時の安芸の国守は、皆さんがよくご存じの毛利家です。元就はもう亡くなっているので、その孫の輝元の時期かと思います。つまり安芸の国主が石見で産出される銀をすべて掌握しているという事実が重要な情報として加えられていると言えます。

備後の箇所を見ますと、十字架のマークが書

かれています。十字架のマークは、この史料全体に複数入っています。これが何のマークかと言いますと、そこにキリシタンがいる、という意味です。例えば、出雲にも十字架のマークが入っていますし、備前にも入っています。備後にも入っていますので、こういった地域にキリシタンがいたというような情報は、今までの研究では、ほとんど知られていません。中国地方でも布教が行われているので、キリシタンがいても不思議ではないのですが、イメージ的にキリスト教布教とは縁の薄い山陰にもキリシタンがいたというのは興味深い情報です。

この史料の内容は、先ほど申し上げたように、ルソン島にやってきた日本人の商人たちから、スペイン人の聖職者や役人たちが話を聞いた調書です。さらに、石見銀がそこでアピールされています。冒頭でお話ししたように、スペイン人は新大陸で多くの銀山を手に入れています。ですから、ポルトガル人と違って「日本の銀には関心はなかった」などという研究者もおりますが、実際には人間の欲というのは、それほど単純なものではないと思います。中国はいくらでも銀を欲しがります。中国人とのより充実した貿易を考えるならば、もしフィリピンの近くに銀を入手する地域があるなら、そこで入手するという方法も魅力的なはずです。

最近、スペインの日本征服の野心を取り上げた本などがあって、その内容を批判するために「スペイン人は新大陸に多くの銀を持っているから日本の銀など必要ない」と他の研究者が言うことがあるのですが、「既にたくさん持っているから必要ない」というは、短絡的に過ぎるのではないでしょうか。

ではなぜ、重要な付加情報が、安芸と石見についてしか記されていないのでしょうか。これらの史料が作成された、つまり日本人商人たちがフィリピンへ渡航した1587年という時期がヒントになるかもしれません。ちょうどその頃、九州だけでなく、中国地方とポルトガルやスペインの関係が深まる一連の出来事がありました。

この頃、周知のように、本州では豊臣秀吉が覇権を確立しました。九州はまだ戦国時代で、薩摩の島津氏が豊後の大友氏を滅亡に追い込んでいました。キリスト教布教に従事するイエズス会は、キリシタン大名の大友宗麟の庇護を得て、豊後に大きな拠点を持っていましたが、島津氏の軍勢が大友領内に侵攻して、いよいよ大友宗麟の敗北が濃くなっていたのが、ちょうど1587年頃です。その頃、イエズス会の宣教師たちは、危険地帯になった豊後府内から、別の場所に自分たちの拠点を移そうと考えていました。その第一候補だったのが、実は現在の山口県の下関でした。下関は当時毛利氏に支配されていました。2014年の大河ドラマで主人公だった黒田官兵衛の斡旋で、毛利氏がイエズス会に教会建設の許可と土地を与え、布教を庇護するといった交渉が、ちょうど1587年の伴天連追放令が出される直前ぐらいに進んでいました。

毛利氏は、当時は浄土真宗（一向宗）の門徒ですから、キリシタンに改宗すること自体は考えていなかったと思います。それでもイエズス会の拠点が領内にできることで、ポルトガル船の入港を誘致できるという思惑があったのではないでしょうか。もし下関を長崎のように、ポルトガル船が来航するような港にする計画が進んでいたとすれば、近隣地域で、銀の入手に関して重要な安芸と石見について、特別な情報がスペイン人にもたらされたことも、特別な意味を持ってきます。

さて、石見の港についてですが、研究者の間では知られているのですが、16世紀末には薩摩の商人が非常に多く、おそらく銀の取引のためにやって来ていたということが知られています。たとえば、薩摩の国主である島津家久が京都に上京した後、帰り道に山陰地方を通って帰るのですが、温泉津や浜田に滞在しました。その際に、たまたま商売のためにやって来ていた多くの薩摩商人に出会ったという記録（『中務大輔家久公御上京日記』（東京大学史料編纂所

所蔵））があります。そこからは、浜田や温泉津が交易港として栄えていたことが分かります。薩摩の船が来航することの重要性についてですが、薩摩にはいわゆる東南アジアや中国からの貿易船が入る坊津（ぼうのつ）や山川（やまがわ）という港がありました。そこの商人たちがわざわざ石見の港にやって来ていたわけですが、おそらく薩摩商人が石見から持ち帰った銀などが、東南アジアや中国との貿易に使われていたのではないかと考えられます。

1580年代、薩摩からは多くの商人たちがフィリピン諸島に出かけています。教科書などでは、江戸時代に入ってから朱印船貿易が始まって、日本人は海外に出かけていくようになり、東南アジアの港町に日本人町ができたというように習いますが、実際にはもっと早い時代から、日本人は海外に出かけていたようです。1580年頃には、日本人の商人が東南アジア辺りまで出かけていたことが分かっています。さらに言えば、16世紀の前半から中頃に盛んであった「倭寇（わこう）」からの連続性ということも指摘できると思います。「倭寇」に関しては、最近では日本人は主力ではなく、その構成員に多くの中国人が入っていたことが知られていますが、やはり九州などで沿海部の日本人が参加していたのも事実です。つまり「倭寇」として海外へ出ていた日本人の流れは16世紀以降ほとんど変わっていなくて、継続して「海の民」たちは海外へ出ていたと考えられます。「倭寇」は掠奪襲撃なども行う海賊的性格で知られていますが、交易にも従事していました。「海の民」の性格が変わるだけで、実際の構成員などはほとんど変わっていなかったのかもしれません。つまり、江戸時代の朱印船の時代になって初めて日本人が東南アジアの港町に出てくのではなく、それより以前、10年か20年は早いと思いますが、日本人が東南アジア辺りに交易に出かけ始めたと考えます。そのように日本人を含む東アジアの海域ネットワークの中での、一つの中心地が薩摩であったのは間違いないでしょう。その薩摩の船が石見に多く来航しているというのは、石見銀が東アジア・東南アジアの海のネットワークを使って出て行ったことを証明していると思います。

先ほどご紹介した史料のように、石見には直接ポルトガル人も来ているということですから、石見の港の国際的な重要性というのがはっきりと浮かび上がってきます。石見銀は採掘・精錬された後、薩摩や博多・長崎のような日本の他の対外貿易港へと運ばれていったことは容易に想像がつきます。それだけではなく、石見の港自体、外国人商人たちが訪れる港であったことが、今回クローズアップした史料から分かってきました。一種類の史料だけでは、なかなか実証性に乏しいとも言えますが、温泉津の沖泊などからは、中国産陶磁器が大量に出土しています。日常的な利用ではなく、明らかに大量輸入したと言えるまとまった量です。このような考古学的成果からも、石見の港の具体的な国際性は、今後実証されてくのではないかと期待しています。現在の山陰地方は、それほど華やかなイメージはありませんが、明治時代以前は、国内流通だけではなく、国際的にも極めて重要であったと言えます。とりわけ16世紀の世界経済を考えますと、地上の最も重要な地域の一つであったと言えるのではないでしょうか。（拍手）

会場の様子（広島会場）

東京会場（抜粋）

私の専門は日本の古文書ではなく、欧文の古文書で日本について書かれた内容の調査・抽出、そして翻訳で、主にポルトガル語とスペイン語の史料を読んでいます。たとえば、ルイス・フロイスというイエズス会の宣教師が16世紀後半の日本について、織田信長や豊臣秀吉のことなど、非常に詳細に書き記しました。これは、1970年頃には日本でも翻訳されて、現在では織豊期の研究では不可欠のものになっています。フロイス以外にも、日本に滞在したヨーロッパの宣教師たちは、日本の記録だけでは明らかにできないことを多々書き残して、書簡をヨーロッパに送っていますので、これらの情報は戦国時代史の研究にも非常に役立てられています。

講演中の岡美穂子氏

さて、本日の講演の題目は、世界史の中の石見銀です。まず、16世紀、新大陸のメキシコや日本で銀山の開発が盛んになった理由についてお話ししましょう。16世紀の初頭、最初にスペイン人たちが新大陸に進出した頃、そこに多くの銀鉱があるということに気づきました。現地のインディオは銀鉱石そのものを「光る石」として、宝のように用いていたのですが、銀の抽出・精錬技術は知りませんでした。そのため、この「光る石」は、威信財、すなわちそれを持っていることで、身分の高さや豊かさを示すシンボル的なものとして、石そのものを大事にしていたわけです。ところがスペイン人がやってきて、その石からは銀が取り出せることを教えました。

もともとヨーロッパではドイツを中心に銀山の開発、そして銀の抽出技術の発展がみられました。スペイン人は新大陸の銀山で、鉱石から銀を抽出して精錬するという作業にとりかかりました。その頃のスペイン人は、イベリア半島の隣国であるポルトガル人と競って世界に進出していましたが、両者とも、進出先で現地の様々な商業ネットワークを吸収していきました。その中で、世界のどこであっても共通して価値をもたすことができるような「貨幣」的な役割を持つものとして、銀の有益性が高まっていきました。16世紀後半に世界中で銀山開発が進んだ背景には、グローバルな経済ネットワークの発達があります。その頃の文明の中心は、ヨーロッパと中華世界であったと言えるのですが、中国にはヨーロッパ人が欲しがるものが集積していました。たとえば、中国産の絹糸、絹織物、陶磁器、もう少し後の時代になるとお茶です。もともと中国の商品は、古代からシルクロードを通ってヨーロッパへもたらされていて、イタリアのヴェネツィアやジェノバなどの都市国家が地中海に拠点を築いて、最後は海路でヨーロッパへと運んでいました。それでも後の時代の海洋ルート、すなわち船で運ぶような量から比べると、決して多いとは言えません。そのため、中国産の商品というのは、非常に高価であったのです。主にポルトガル人によって、喜望峰を超えてアジアへの回路が開拓されると、中国産の商品を船で大量に運ぶことが可能になりました。そこで、中国人が対価として欲しがるものを持っていく必要が出てきます。そのため、世界中の採掘が可能な銀鉱開発が活性化しました。銀は中国では、非常に需要の高いものでした。

もともと中国では銅銭が中心的な通貨でした。中国で発行された宋（銅）銭は日本にも輸入されて、日本の流通経済の中で貨幣として使われていました。明代に入ると、世情が落ち着

き、江南デルタ、現在の上海を中心にした長江よりも南の地域で、農業技術に大きな発展が見られ、大量の農産物が中国国内の市場で取引されるようになりました。農家と売り手の直接売買ではなく、問屋的な仲介業者も増えていきます。日常的な小売りの売買は銅銭で行われても、問屋の仕事では大きなお金が動きます。そこで銅銭を通貨とすると、非常に重量が嵩みます。そこで、銀を銅銭の代わりに使う習慣が、明代に一般的になりました。中国の明代は江南デルタを中心に農業開発、そしてそれに伴う都市経済の発展というものがみられましたので、その中でより高い価値を持ち、それほどく重くなく、使いやすい銀の需要が高まっていきます。ただし、中国では銀貨ではなく、秤量貨幣、すなわち常に重さを量る形で流通します。

さらに中国では、1580年ごろに「一条鞭法」と呼ばれる、様々な税金を銀で納入する制度が敷かれました。税金を銀で納入する制度は、当時の明朝の軍事的な状況と表裏一体のものです。ちょうどその頃、中国の北方の満州族の一つである女真という部族が、南下して明朝の侵略を開始します。同じ時期、秀吉は最終的には中華覇権を目指して朝鮮半島に渡ります。16世紀末は、明朝が外敵によって脅威に晒されていた時期なのです。防衛のためには、多くの兵士が必要です。そしてこれらの兵士には、銀で報酬を支払うことになっていました。中華の軍事的なバランスの崩れ、商品の大量移動などの理由を背景に、銀の需要が高まっていったと言われています。

会場の様子（東京会場）

歴史学の中で、グローバルヒストリーという分野が最近注目されています。今まで細かな事象を追うことが日本の歴史学の在り方だったのですが、世界の大きな動きの中で東アジアや日本の歴史の動きを捉えようとする歴史研究者も増加しています。今お話ししているような、中国での銀の需要が、16世紀以降の世界経済の展開にどう働きかけたのか等々、主に1970年代以降、欧米の研究者を中心に世界の大きなうねりの中での地域の変化を捉えようとする傾向が顕著になりました。日本の歴史研究で今日もまだ多数派である、古文書の解読を通して、小規模な地域の一事例を研究するようなミクロな研究は、欧米の歴史学界では既に淘汰されたと言っても良いでしょう。ある地域のことを限定的に研究している人でさえ、関連する地域的な横の繋がり、時間的な縦の繋がりを意識することが求められています。

欧米の研究者が先に言い出したのですが、地球を上の方から俯瞰して世界の歴史を辿ると、16世紀辺りまで、世界で最も豊かだったのは、中国の江南地域で、そこで生産される様々な商品を求めて、ヨーロッパ人が世界中を動き回った結果、銀の需要が非常に高くなり、たまたま植民地化したラテンアメリカで大量の銀を手に入れることができたスペインが帝国を築くことができたのではないか、という説が最近では広く受容されています。つまり、中国が必要とするものを供給できる地域、あるいはその地域を有している国が、世界経済の中心になる傾向は、16世紀に始まって現代まで続いていると言えるのではないでしょうか。

1520年代に石見銀山の開発が進んだのも偶然ではないかもしれません。というのも、もともと大森の山に「光る石」があることは知られていたのに、わざわざ採掘して銀を取り出すということには至っていなかっただけで、その採掘の労力に見合う価値が銀に見いだされたからこそ、大規模な開発事業が進んだと考えられるからです。その意味では、16世紀前半に銀山開発

が、世界各地で進んだ背景には、やはり経済的動機と結びついた必然性がそこにあると考えた方がよいでしょう。そしてその多くの銀の存在が、日本という島に多くの外国人商人たちを惹きつけることになったのです。

ここからは、世界経済の中の石見銀山の話に入ります。マカオに住むポルトガル人が日本へやってきておこなっていた南蛮貿易で、石見銀を含む大量の日本銀が国外へと運び出されたことは凡そ知られていましたが、どこからどのくらい、という話になると、なかなか実証的な根拠は出しにくいものです。

私の研究の一つに、ポルトガル人が日本と中国の間を結んで行っていた南蛮貿易の実態として、その資本の多くが日本人からの委託や投資に拠っていたことを証明したものがあります。基本的にこれらの資本は「銀」でしたから、当然そこには石見銀が含まれたでしょう。長崎の商人というのは、元々は博多出身の人が多いですから、博多に運ばれた銀が長崎から貿易に投資されていたのは確実です。残っている投資の証文も、博多商人のものが多いです。石見銀山の大規模な開発も博多商人の神屋寿禎が始めたものですから、やはり博多と石見の繋がりは相当深かったと考えるべきでしょう。

実は最近、石見＝博多＝長崎ルート以外に、石見の港に直接ポルトガル人が到来していたことを示す史料が見つかりました。島根県を中心とした地元の新聞社山陰中央新報で、先月の８月24日他、計３回に分けて、この史料のことが取りあげられました。

史料の性格を言いますと、1587年に書かれたスペイン語の史料です。秀吉は1590年頃にフィリピン総督府に宛てて、外交の動きを見せますが、それよりも少し前のことです。1587年、約40人の日本人の商人が、マニラへ渡航しました。その際、現地のスペイン人官僚やカトリック教会の関係者と話し、その内容をまとめたのがこの史料になります。スペインの首都マドリッドの国立歴史文書館に保管されていました。日本語で書かれた日本の地域に関する情報もあります。この日本語部分は非常に達筆ですから、外国人が書いたものではなくて、日本人が書いて提供したのでしょう。そこにスペイン人が読み方と、特に重要な情報を走り書きのような感じで書いています。

この日本語の情報は、４枚にわたっています。他の頁には、白いお餅が連なったような形の地図があります。一瞬、何か分かりませんが、よく見ると日本の地図だと分かります。このような形の地図は行基型地図と呼ばれており、たとえば15世紀末に朝鮮で作られた海東諸国紀という日本に関する地理情報をまとめた本の中の地図にも似たものがあります。海東諸国紀の中では、朝鮮半島からは山陰は非常に近いので、石見や出雲についてもしっかり描かれています。基本的にはこの行基型の地図が、当時の日本人の日本列島に関する標準的な知識であると思われます。そのような地図がフィリピン諸島に居たスペイン人に伝えられ、それと同時に、このような日本の67か国の地域についての情報ももたらされたのです。基本的には、それぞれの地域について、地名以外の情報がないのですが、石見、安芸、薩摩、山城（京都を含む）についてだけ、付加情報があります。フィリピンに到着した日本人たちについては、それぞれの出身地名が書かれています。

まず、「石見」と漢字で書かれたところを見てみましょう。ローマ字では “Provincia de Yvani” と読めます。さらにスペイン語で、「ここに大量の銀がある」と書かれています。この史料そのものは、1939年に中村拓という本業が生化学・医学で、地理歴史学者だった人物が詳細をフランス語で論文発表しました。中村氏は趣味が昂じて地図の研究でも非常に大きな功績を残しました。まだ海外渡航が一般的ではなかった戦前、フランスに留学していたので、その頃マドリッドまで足を延ばしたのでしょう。本業の生化学でも日本の第一人者ですが、古地図学でも国際的に高い評価を得ていました。先

ほど言いましたように、この地図を含む史料についての発見は、フランス語で論文発表されているので、日本では気づかれにくかったと言えます。スペイン語の古文書部分に関しては、中村氏は本業ではなかったこと、その後、スペインの古文書館で一時期所在が不明になり、研究者がアクセスし難い状況になっていたこと等で、スペイン語の記述部分の解読は、戦後も進みませんでした。中村氏は「ここに銀がある」と解読したのですが、それから先の部分はお読みにならなかったようです。

「石見」の部分に、「ここに大量の銀がある」と書かれていること自体が珍しいので、実物を確認したくて、この史料を取り寄せたところ、その先にも、何か記述があることに気づきました。そこには、「当地にはポルトガル人が来航する」という記述があることに気づいたのです。

もう一か所、安芸に関する部分です。安芸に関しては、この土地の領主が上述の銀を全て享受するというようなことが書かれています。その頃の安芸の国主は毛利氏です。毛利氏が石見銀山の銀を掌握しているという1580年代の正確な情報が、フィリピンにいたスペイン人に伝えられたことが分かります。

さらに、色々な国名の横には、十字架のマークが記されています。これは、それらの地域に、キリシタンがいるというマークです。今までキリシタンがいた地域として知られていなかったようなところにも、この十字架のマークが記されています。九州ですと、キリシタンがいて当然の感覚がありますが、出雲にもこのマークがあります。この史料の中で、石見と安芸、薩摩（キリスト教徒が１人とその妻がいる）、山城（都がある）にだけ、より詳しい情報があり、銀とキリシタンについて詳しく書かれていると言えます。

この史料が製作された背景を考えましょう。スペイン人たちは1570年頃にフィリピンのルソン島を征服して、フィリピン諸島の占有を宣言します。平川新（ひらかわあらた）氏という研究者が、2018年に『戦国日本と大航海時代』という本を出されて、その中で、豊臣秀吉の朝鮮出兵は、じつは日本を含む東アジアに押し寄せてくるかもしれないスペイン人の軍事力を排除するためのものであった、という新説を展開されています。他の研究者は「荒唐無稽」と言ったりして批判しているのですが、私は部分的には賛同できると思っています。批判する方の意見の根拠は、スペイン人は新大陸に大量の銀を持っているから、日本を征服して銀をわざわざ入手する必要はない、というものです。既に持っているから不要という発想は、とても現代的です。中国との貿易のために、スペイン人たちは新大陸から太平洋を渡り、わざわざフィリピンに拠点を置いているわけです。もしフィリピンにより近い日本という地域が彼らの領有になったなら、そこにある銀というのは、当然役に立つものとして認識されます。

1587年にスペイン人が日本人から聴取した情報に、銀に関するものが多く含まれているというのは、スペイン人が日本の銀に少なからぬ興味を持っていたことを示しています。スペインが最終的に日本への軍事行動に至らなかったのは、もっと他に別の理由があるのですが、全くその関心がなかったわけではないですし、日本の統一政権がそういった動きに鈍感であったとも考えられない、と思っています。ポルトガル人の海外進出は、主に現地の政権との表面的な協力関係に拠るものが多く、従って戦闘も限定的なのですが、スペイン帝国の海外遠征は、非常に軍事的で、「商業利益」よりも帝国的な領土拡張の意図が多分に含まれます。その傾向は日本で活動するイエズス会も熟知していて、イエズス会士の中には、日本のスペイン領化に期待している人も少なからずいたのが現状です。

世界の現状とは別に、日本でも1587年頃というのは、歴史の大きな転換点であったと考えられます。織田信長の天下統一事業は、豊臣秀吉に引き継がれ、ようやく中国・四国地方が秀吉

の傘下に下り、いよいよ残るは九州という時期です。九州は島津氏と大友氏の最後の攻防が繰り広げられていて、大友氏の敗色が濃くなっていました。イエズス会は大友領内をキリスト教布教の拠点にしていましたが、いよいよ自分たちの身に危険が迫っていることをひしひしと感じていました。その時々の情勢を見るのに非常に長けているイエズス会という集団は、豊後のキリシタン教会を下関に移転させる計画を立てています。2014年の大河ドラマの主人公であった黒田官兵衛が、これより少し前にキリシタンに入信しています。秀吉の信頼の厚かった官兵衛の斡旋で、毛利・小早川氏が下関や山口にキリスト教布教の拠点となるような環境を提供することを申し出たのです。

イエズス会の史料の中には、下関にイエズス会の拠点を置くための交渉の細かい点が書かれています。まず官兵衛が下関に到着し、そこに日本のキリスト教布教の拠点となるような大きな教会を建立するよう、毛利・小早川氏と交渉します。それだけではなく、様々な優遇策を付ける交渉まで行います。例えば、当時の日本の仏教寺院は領主に税金を納める義務があるのですが、その免除、それ以外の特権も、毛利・小早川氏に対して交渉します。もちろんその背景には、下関にイエズス会の拠点ができたなら、ポルトガル船が入港してきて、長崎ではなく下関が南蛮貿易の拠点になって、非常に栄えるという目論見があったでしょう。毛利氏は浄土真宗の有力な信徒でしたから、キリシタンの庇護者になるというのは、相当の利益がなければ想定外のことでした。

長崎開港時の研究をされている安野眞幸（あんのまさき）氏は、教会領長崎というのは、ヨーロッパ人が占領した港ということではなく、在来の日本社会に存在した寺社領、寺社荘園的な土地の在り方であると考えるべきであると言っておられて、私もそう思っています。官兵衛の斡旋で、毛利・小早川氏がイエズス会に申し出た、土地の永代所有許可、税金を免除等々というのは、長崎で大村純忠がイエズス会に対して申し出た条件とほとんど同じです。当時の日本の経済流通・文化の中心はやはり畿内ですから、畿内により近い本州の西端にポルトガル船が入港するのは非常に都合のよいことですし、イエズス会もゆくゆくは本州でキリシタンを増やすことに関心があるので、下関を布教拠点にすることは非常に魅力的であったと思います。

先ほどの史料の話に戻りますと、安芸と石見について特別な記述があるのは、この「下関の長崎化」計画と重なる時期ですから、下関に近いところに銀山があり、その銀を掌中に収めている毛利氏のアピールがそこに含まれていると考えると、非常につじつまが合う気がします。官兵衛が斡旋した話ですが、秀吉の合意がなくて進められた話ではないと思います。おそらく秀吉は、天下統一を果たした後は、九州ではなくて、自分の目が行き届く本州で、南蛮貿易をさせようという計画があったのではないかと考えています。そう考えると、このフィリピンを訪れた日本人たちも、ただ単に偶然に行ったわけではなく、何らかの政治的意図が背景にあったと考えるべきであろうと思います。

先ほど薩摩と石見は実はネットワークで結ばれていると言う話が出ました。1575年、当時の島津の当主である家久が京都に上洛した際、帰りに海路で山陰の港を訪れながら鹿児島まで戻りました。陰暦の６月26日から27日にかけて温泉津、浜田の港に滞在し、そこで同地に入港していた鹿児島の商人たちから饗応を受けたことが記されています。加治木（かじき）や肝付（きもつき）という地名もみられます。たまたま島津家久が温泉津の港に入ったところ、鹿児島の商人がたくさんいて、同郷のよしみで宴が盛り上がったというようなことが、家久の上京日記に書かれています。実は温泉津の港では石敢當（いしがんとう）と呼ばれる、薩摩や琉球の商人が出入りした地域に必ず設けられるような航海の安全に関わる石碑が見つかっています。その他の史料からも、温泉津の港には相当数の薩摩の船が来ていたことが推測されます。

薩摩は、16世紀の後半、琉球だけはなく、中国船や東南アジアからの船がかなり領内の港にやってきて、交易が繁栄していました。薩摩にはポルトガル船も入港しています。16世紀後半の対外貿易というと、長崎のイメージが強いと思いますが、16世紀後半の薩摩の港は、東アジアの貿易の中では非常に重要な存在で、そこから海外への様々なルートが伸びていました。この薩摩の商人たちが、わざわざ石見まで取引にきていることが分かる史料は、先ほどの島津家久の日記以外にも、結構あります。薩摩と石見の交易ルートはかなり恒常的かつ太いラインで結ばれていたと考えられます。

ちょうど1580年代には、薩摩からフィリピンに渡航する船が増えていました。それは薩摩の船であったり華人の船であったりするのですが、いずれにせよ朱印船貿易が始まる前に、薩摩がフィリピンとの貿易を始めているのは興味深いと思います。

話をまとめますと、石見の港に薩摩船が多く入港していたという事実は、石見から薩摩を通じて、中国や琉球、東南アジア方面に日本の銀が流通していたことを示しています。さらに、16世紀後半の対外貿易で繁栄した長崎は、初期に移り住んできた集団の多くが博多の人々でした。つまり、長崎と博多は兄弟のような町であったといえます。ですから、両者の関係は非常に深く、石見銀山の大規模開発を始めたのも、博多商人の神屋寿禎ですから、石見と博多も当然太いラインで繋がっていたと言えるでしょう。その中で、博多を通じて長崎からも南蛮船で銀が運ばれていました。それだけでなく、マカオのジャンク船（私貿易）商人たちが、石見の港に直接来航していたと考えられます。石見の港は、直接的にも間接的にも、日本以外の世界へと繋がっていたのは明白です。

長崎などの九州の都市では、対外貿易で栄えたことを売りにして、南蛮関係の祭りなどもありますが、石見の港の研究が進めば、もっと国際性などもアピールできるのではないかと考えています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

ロビーパネル展の様子（東京会場）

資料１

島根の世界遺産講座

「石見」へのポルトガル人来航を示す史料

岡　美穂子（東京大学）

所蔵　スペイン国立歴史文書館（マドリッド）

史料（手書き写本）　1587年７月４日付

史料名　「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」

原本　スペイン国立歴史文書館

下記に分析

写本１（異本）　東洋文庫（東京都文京区）　但し東洋文庫本には、地図は含まず、日本の地名に付されたスペイン語の注記もない。

貴重書　MS-14 Japon-Filipinas. Copia de la peticion de los Japoneses- ... a D. fray Domingo de Salazar...

写本２（東洋文庫本）の日本語訳は、Johannes Laures S.J.「日本とフィリッピン諸島との初期の交通に関する一古文書」『キリシタン研究』第５（1959）に掲載。

写本２、もともと、地名のスペイン語情報を含まないので、「石見」「安芸」に関する情報は伝わらず。日本人の研究者は基本的にこのラウレス論文の日本語訳を用いるため、より正確な原本（マドリッド本）の確認を怠ってきた。

ラウレス論文の内容は、日本＝スペイン関係史研究者には、それなりに利用されている。

原本（マドリッド本）の分析

原本は、中村拓氏が Les Cartes du Japon qui servaient de modèle aux cartographes européeans au debut des relations de lOccident avec le Japan, Monumenta Nipponica, vol. 2, No. ２、1939で概要紹介。

ただし、「石見」に付されたスペイン語の注は、不完全に読まれる。

中村氏は、「Provincia de Yuani. Ay mucha plata aqui van los…… 」

[los portugueses]が読めていない。

正しくは、

「Provincia de Yvani Ay mucha plata. Aqui van los portugueses 」

写本２には、そもそもこのスペイン語は含まれない。

＊つまり、原本の紹介は、フランス語と不完全なスペイン語翻刻でおこなわれ、日本語翻訳がおこな

われた写本には、地図や地名のスペイン語情報がもともと含まれないため、

「Provincia de Yvami Ay mucha plata. Aqui van los portugueses 」

＝《イワニ国 銀が大量にある。当地にはポルトガル人が来航する》という情報がこの史料にあることが知られてこなかった。

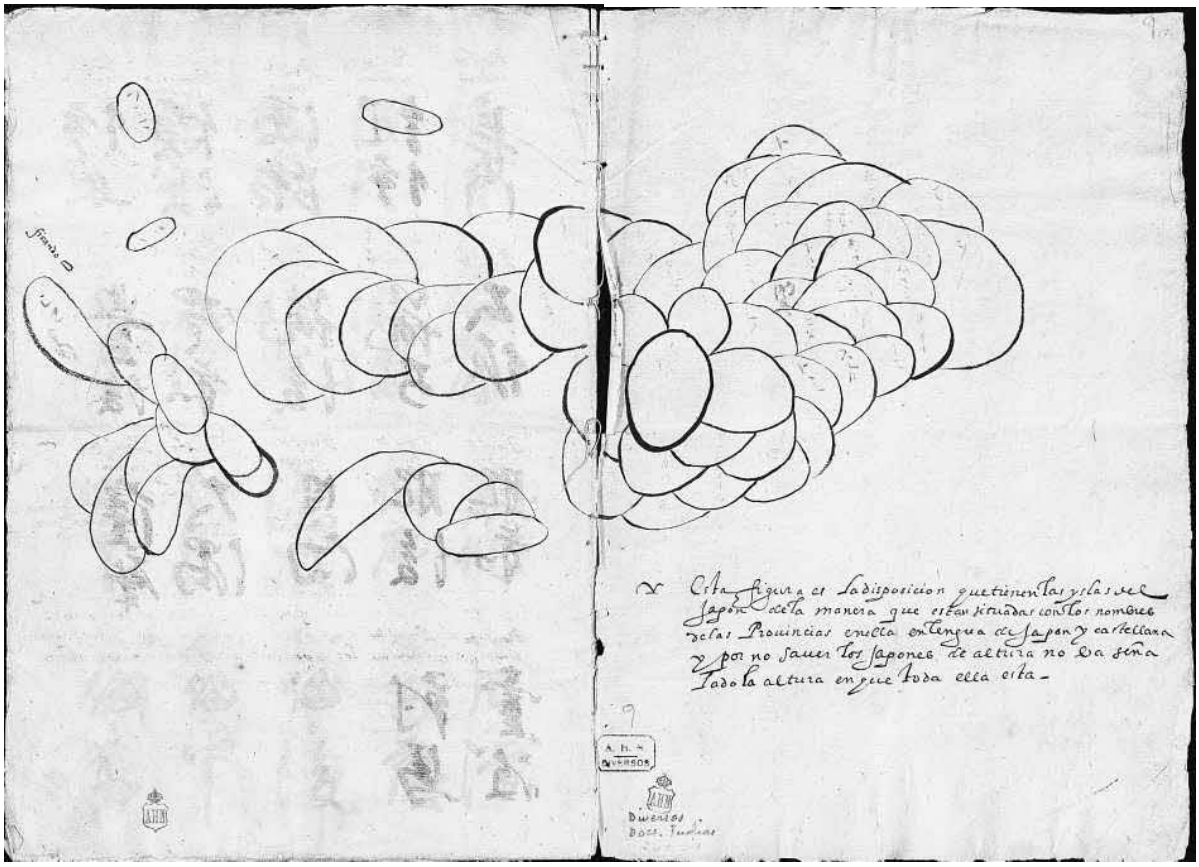
ちなみに、原本を用いた中村氏による、「安芸」に関するスペイン語説明も、かなり翻字間違いがある。

中村翻刻「Provincia de Haqui. El rey desta provincia gozader de la plata de la provincia a vi ba nombrada」

正確には、「Provincia de Haqui. El Rey desta provincia goza de toda la plata de la provincia ariba nombrado」

意味「アキ国 当国の王は上述の（イワニ）国のすべての銀を享受する」

（史料１）



「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」
スペイン国立歴史文書館蔵　※複製・転載不可
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9 “La mina de plata Iwami” .
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional,DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)

この地図は上記、中村論文ほか、岡本良知『16世紀における日本地図の発達』等で紹介。

本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。

（史料２）

「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」
スペイン国立歴史文書館蔵　※複製・転載不可
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9 “La mina de plata Iwami” .
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional,DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)

本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。

（史料３）

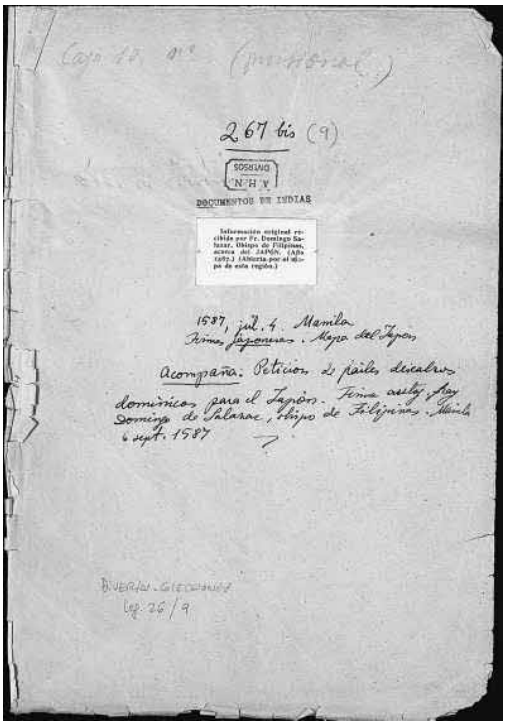
（史料４）

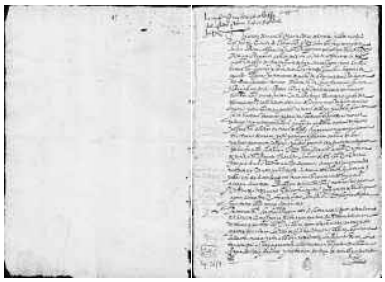
「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」
スペイン国立歴史文書館蔵　※複製・転載不可
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9 “La mina de plata Iwami”.
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional, DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)

本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。

資料

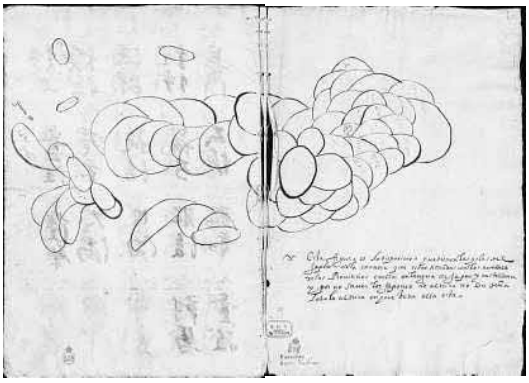
参考資料　「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」全29頁

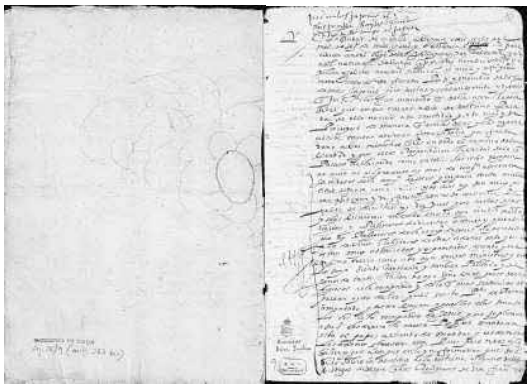




「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」
スペイン国立歴史文書館蔵　※複製・転載不可
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9 “La mina de plata Iwami”.
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional, DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)

本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。





「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」
スペイン国立歴史文書館蔵　※複製・転載不可
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9 “La mina de plata Iwami”.
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional, DIVERSOS-COLECCIONES, 26, N. 9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)

本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。

資料２－１

（土曜日）　山陰中央新報　明治34年11月5日第3種郵便物認可　©山陰中央新報社 2019　第27827号（日刊）

8月24日
土曜日

発行所
山陰中央新報社
松江市殿町383
郵便番号 690-8668
電話 総合案内 0852 (32) 3440

購読お申し込み
0120-49-2550
山陰中央新報
LINEニュース
配信登録は
こちらから

山陰中央新報

ポルトガル商人 石見国来航

往来記す文献 スペインに

銀の直接取引示す

「マニラ来航日本人への質問録と日本情報」の一部。上段の左から2番目に書かれた「石見」の文字に重ねるように、スペイン語でポルトガル人来航の情報が記してある。両隣には「出雲」「隠岐」の文字も見える。下段の右から2番目が「安芸」（岡美穂子准教授提供）

桃山時代、日本の貿易国ポルトガルの商人が銀を直接取引するため、石見国を訪れていたことを示す文献がスペインで確認された。これまでは、古地図を通して石見銀山の存在が西洋で知られていたことは分かっていたが、往来を記した資料は見つかっていなかった。国際貿易に欠かせなかった石見銀の力を物語るとともに、世界遺産「石見銀山遺跡」（大田市）の価値をさらに高める貴重な発見となる。

（引野道生）＝26面に関連記事

銀山（大田）の価値高める発見

文献には、漢字で書かれた旧国名「石見」の文字に重ねるように、スペイン語で「イワニ国　銀が大量にある。当地にはポルトガル人が来航する」と記されていた。

さらに、現在の広島県西部に当たる「安芸」の部分には「アキ国　当国の王は上述の（イワニ）国のすべての銀を享受する」と書かれ、毛利氏による石見銀山支配の状況を説明。「出雲」などの位置には、キリスト教徒の存在を示す十字のマークの記載もあった。

毛利元就が石見銀山産の銀で鋳造した「御取納（おとりおさめ）丁銀」（島根県教育委員会所蔵）

文献は1587年7月4日付の「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（キリスト教ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」と題した冊子。スペイン国立文書館（マドリード）に残されているのを、東京大学院情報学環の岡美穂子准教授（45）＝対外関係史、キリシタン史＝が確認した。

87年に平戸や豊後、堺、博多、京都などの日本人の商人11人が九州の平戸を出発してフィリピン・マニラに渡航した際、スペイン人のサラザール司教が現地で聞き取った内容を書き残した紙で、重要情報として本国に送られたという。

当時、スペインはポルトガルと国際貿易の覇権を争っており、ポルトガルが独占状態だった日本で大量の銀を産出する石見銀山の存在を重視し、作成させたとみられる。

石見国はポルトガル人が1560年代に作った日本地図で「銀鉱山群」と表記され、西洋で早くから石見銀山の存在が知られていたことは分かっていた。ただ、西洋人が石見銀を求めて来航していたことを示す資料は見つかっていなかった。

岡准教授は「石見に銀が大量にあり、安芸の国主がそれを牛耳っていたのは史実と合致する。今回の資料からポルトガル人が直接訪れ、石見銀を入手していたとは驚きだ」と話した。

クリック

ポルトガルの日本進出

1543年に種子島に流れ着き、日本に鉄砲を伝来。49年には宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸してキリスト教を伝えた。50年代になると、中国南部のマカオを貿易と布教の拠点とし、ポルトガル船が平戸や長崎を訪れ、交易していた。

山陰中央新報　2019年（令和元年）8月24日

資料２－２

（第３種郵便物認可）　山陰

ポルトガル人往来

11人の日本商人名も記載

石見銀 流通の実態分かるか

スペイン国立文書館で確認された「質問録」には、キリスト教の洗礼を受けた日本人の商人11人の名前も記されていた。それぞれの素性を研究することで、東アジアを飛び交った石見銀の流通の実態解明につながる可能性がある。

（引野道生）＝1面参照

16～17世紀の東アジア

質問録が作成された15 80年代は世界の大航海時代。日本の商人がアジア各地に盛んに進出し、キリスト教の布教や交易目的で来航したポルトガル人、スペイン人と頻繁に出会った。

日本人の商人がスペイン人司教の聞き取りに応じた場所は、当時の国際貿易の最前線だったフィリピン・マニラ。11人の名前の詳しい判読はこれからだが、それぞれ平戸や博多、堺といった中世末期の日本の代表的な貿易港を抱える地域の出身者だった。

石見銀山研究に詳しい東京大名誉教授の村井章介さん(70)＝日本中世史＝は「11人の商人こそ、石見銀の搬出に仕事としてかかわり、マニラを訪れた際、貿易に用いるために石見銀を持っていた可能性が高い」と分析する。

当時、日本での布教や交易活動はポルトガルの独占状態にあり「スペインにとっては、自分たちも日本銀を用いたビジネスに食い込みたいという思いがあったのではないか」と推測。ライバル国のポルトガルの動向を記したとみている。

さらに村井さんは、石見銀山遺跡（大田市）が2007年に世界遺産に登録された際の決め手の一つとなった「世界的に重要な経済・文化交流を生み出した」役割を裏付ける今回の資料の価値について、「これまで漠然としていた欧州勢力と石見銀山の関係性が鮮明になった」と高く評価した。

東京大大学院情報学環准教授の岡美穂子さん(45)＝対外関係史、キリシタン史＝が、スペイン国立文書館が所蔵する「質問録」を解読したのは6月。漢字で書かれた「石見」の位置に、スペイン語で「当地にはポルトガル人が来航する」と記されていることを読み解いた。

質問録は日本に写本が伝わっているものの、スペイン語の表記が欠落しており、原本の写真を取り寄せて精読。内容が判明すると、「直接来航していたことを示す重要な資料だ」と直感した。

東大大学院准教授・岡さん

原本写真取り寄せ解読

石見銀山にこだわり研究

岡さんは、京都大大学院生時代の1997年、恩師の脇田晴子元滋賀県立大教授（故人）に誘われ、「石見銀山遺跡」の世界遺産登録を目指す島根県の石見銀山歴史文献調査団に参加。調査員としてポルトガルとスペインの文献調査を担った。

調査活動では、博多商人が中心となり、南蛮貿易に投資した日本銀が巨額におよんだ実像を解明。調査団は既に解散したが、その後も石見銀山にこだわった研究を進め、現在は県の石見銀山遺跡調査専門委員会の委員を務めている。

調査員手当を学費などに充て、研究活動に没頭してきた岡さんは「島根県からバイト料をもらうと同時に、自らの研究の方向性も決まった。島根と石見銀山には感謝しており、思い出深い」と話した。

（引野道生）

「ポルトガル人が直接、石見を訪れていたとは驚きだ」と話す岡美穂子准教授＝東京都内

山陰中央新報　2019年（令和元年）8月24日

資料２－３

（第３種郵便物認可）　山陰中央新報

温泉津は「国際貿易港」？

石見銀流通物語る「質問録」

16世紀にポルトガルの商人が銀を直接取引するため、石見国を訪れていたことを示す文献「質問録」がスペインで確認された。東アジアを飛び交った石見銀の流通実態の一端を物語るとともに、世界遺産「石見銀山遺跡」（大田市）の価値をさらに高める資料が作成された当時の時代背景を追った。

（雲南支局・引野道生）

ニュース追跡

薩摩、平戸から商人に情報か

さらなる発掘調査必要

「年に数回、ポルトガルの商人が石見を訪れていたのではないか」

文献の原本写真をスペイン国立文書館から取り寄せ、解読した東京大大学院情報学環の岡美穂子准教授（45）―対外関係史、キリシタン史―が当時の様子を推察する。

質問録が作成された1587年、九州・豊後（大分県）のキリシタン大名だった大友宗麟（そうりん）が島津氏に敗れて没し、ポルトガルのイエズス会が新たに下関（山口県）を布教の拠点にする動きがあった。

中国地方を支配していた毛利氏を支える小早川氏がこれを歓迎し、ポルトガル人の宣教師を招待したとされ、岡准教授は「布教の中心地に近くなれば当然、貿易もできるようになる」と説明する。

その上で、ポルトガル商人はキリスト教の布教と貿易の拠点だった中国南部のマカオから「私貿易船」で来航したと分析。日本人が好む中国産の陶磁器や薬、生糸を持ち込み、銀と交換していたとみる。

3000点の陶磁器破片

実際、来航の裏付けになりそうな出土品が石見銀の積み出し港として栄えた温泉津の港近くで見つかっている。2016年6月に約3千点の貿易に使われた陶磁器の破片が出土。いずれも中国製で、質問録の作成年代と重なる1575～1600年製だった。

その中に「正体不明の金属工芸品が見つかった」と話すのは、大田市教育委員会石見銀山課の山手貴生主任（35）。銅製で金メッキを施した装飾品（横4㌢、縦3㌢）で、花やミツバチのような文様がある透かし彫りが特徴で、中国・明時代の長寿を祈る長命鎖との見方がある一方、ポルトガルの金属加工技術を用いてインドで作られた細工の可能性もあるという。

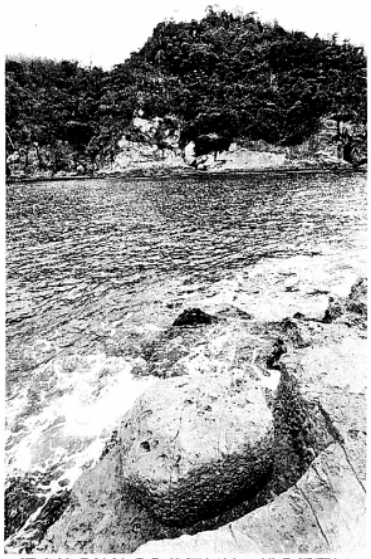
ポルトガル船寄港

ポルトガル商人はいかに石見銀山にたどり着いたのか。石見銀山資料館（大田市大森町）の仲野義文館長（54）は、九州の平戸、薩摩とのつながりを重視する。

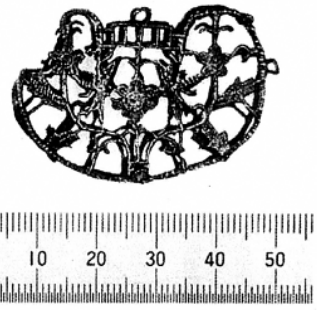
古文書によると、ポルトガル船は1550年から61年にかけて毎年、平戸に寄港していたとされ、75年には薩摩の戦国大名・島津家久が石見銀山を訪れ、船で温泉津から平戸を経て薩摩に帰国した記録も残る。

薩摩―平戸―温泉津の海上ルートが確立していたとみる仲野館長は「ポルトガル人は薩摩や平戸で石見銀山の情報を入手し、日本人を雇って案内させたのではないか」と考察する。

大航海時代のダイナミックな動きを浮かび上がらせた質問録の記述は、異国の地の商人を引きつけた石見銀の魅力を改めて示すものだ。同時に、温泉津が「国際貿易港」だった姿を踏まえ、さらなる発掘調査や文献研究が求められる。



温泉津の沖泊の入り江には、船の係留に使われた鼻ぐり岩が多数残り、中世の港の様子をほうふつとさせる＝大田市温泉津町



温泉津の港近くで出土した正体不明の金属工芸品（大田市教育委員会提供）

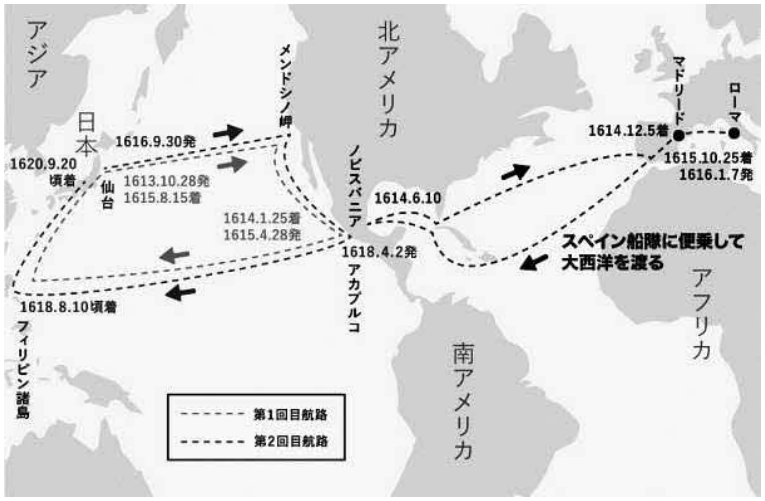
温泉津の港近くで出土した中国製の陶磁器（大田市教育委員会提供）

クリック

質問録　スペイン国立文書館所蔵の「フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（キリスト教ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」。1587年にスペイン人司教が日本の商人11人に聞き取った情報を書き残した冊子で、漢字で書かれた「石見」の文字に重ねるようにスペイン語で「イワニ国　銀が大量にある。当地にはポルトガル人が来航する」との記述がある。

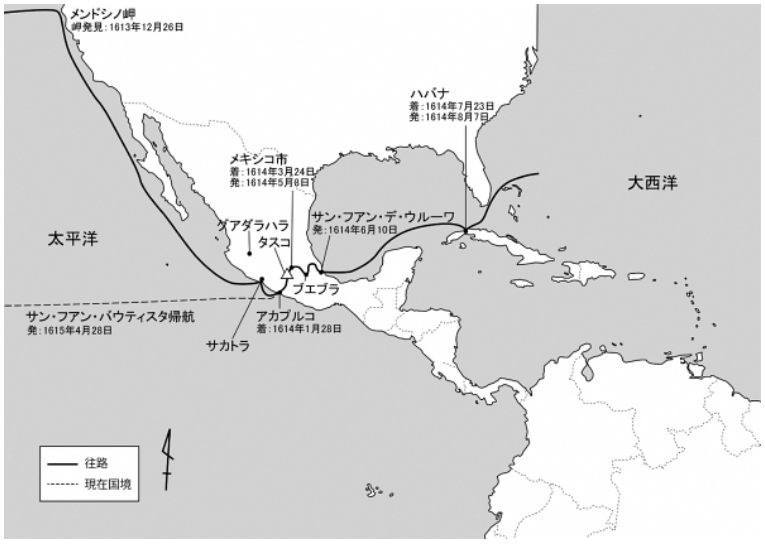
山陰中央新報　2019年（令和元年）8月27日

スライド１



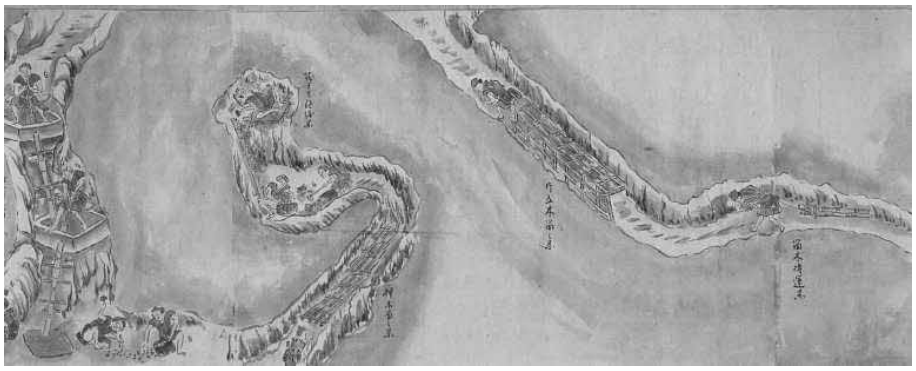
サン・ファン・パウティスタ航海図
（宮城県慶長使節船ミュージアム所蔵・提供）

スライド２



慶長遣欧使節のメキシコでの旅程

スライド３



銀山絵巻 「石見銀山鉱山図解」（個人所蔵）

ちらし（広島会場）

北前船
諸国御客船帳（横ケ瀬家 蔵、浜田市教育委員会提供）
重要美術品 南蛮屏風（堺市博物館 蔵）
温泉津の街並み
ティセラ「日本図」（島根県立古代出雲歴史博物館 蔵）
御取納丁銀（島根県立古代出雲歴史博物館 蔵）
島根の世界遺産
日本遺産講座
聴講無料
要事前申込
第1講
北前船で栄えた石見・出雲
～日本遺産 浜田・外ノ浦を中心として～
―日本遺産 荒波を越えた男たちの夢が結いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～―
2019年9月14日（土）
13:30～（受付13:00～）
会場／中国新聞ホール
（広島市中区土橋町7-1 中国新聞ビル7階）
講師／歴史紀行作家、エッセイスト
加藤 貞仁氏
1952年生まれ。福島市出身。明治大学を卒業後、読売新聞社に入社。秋田支局、経済部、生活情報部などを歴任。97年に退社後、著述業の道に。2005年、中日本高速道路に入社し、その後子会社に移籍。2017年に退職。現在、日本エッセイストクラブ会員。主な著作に『北前船　寄港地ガイド』、『海の総合商社　北前船』（いずれも無明舎出版）など。俳句『杉』にエッセイ「房総薬園日記」を連載中。
定員500人（先着順）
大航海時代、アジアとヨーロッパの経済や文化交流に、多大なる影響をもたらした「石見銀」。
江戸から明治にかけて北前船の風待ち港で、瀬戸内方面への中継点として栄えた浜田最大の貿易港「外ノ浦」。
魅力的なふたつの歴史物語をひも解きます。
第2講
世界史の中の石見銀
～世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観～
2019年9月21日（土）
13:30～（受付13:00～）
会場／中国新聞ホール
（広島市中区土橋町7-1 中国新聞ビル7階）
講師／東京大学大学院情報学環（史料編纂所兼任）准教授
岡 美穂子氏
1974年、神戸市生まれ。大阪外国語大学（現、大阪大学）卒業。京都大学大学院人間・環境学研究科修了（人間・環境学博士）。2003年より東京大学史料編纂所助手・助教を経て、現職。専門は近世初頭日本の対外関係史とキリシタン史。主な著作に『商人と宣教師　南蛮貿易の世界』（東京大学出版会、2010年）、『大航海時代の日本人奴隷』（中央公論新社、2017年）がある。
定員500人（先着順）
申し込み方法
郵便番号、住所、名前、年齢、電話番号、同伴者の名前、人数と、「第1講だけ聴講希望」「第2講だけ聴講希望」「両方を聴講希望」のいずれかを記入し、はがきかファクス、メールで、それぞれ「島根講座」係まで。
定員に達し次第締め切り。聴講券を送付します。
●はがき 〒730-0854広島市中区土橋町7の1、中国新聞企画サービス
●ファクス 082(294)0804　●メール event7@c-kikaku.co.jp
問い合わせ　中国新聞企画サービス　☎082(236)2244　※平日9:30～17:30
※お申し込みいただきました個人情報は応募者の管理、連絡のみに使用します。主催者・共催者が責任をもって管理し、第三者には開示しません。
主催／島根県教育委員会　共催／浜田市、大田市教育委員会、中国新聞社
当日は手話通訳があります

ちらし（東京会場）

受講無料
手話通訳あり
日御碕神社と夕景の経島（出雲市）
重要美術品「南蛮屏風」（堺市博物館　蔵）
令和元年
島根の世界遺産・日本遺産
特別講座
第1回　日本遺産
9月16日（月・祝）
東京証券会館ホール　定員300人
13：30~15：30（開場12：30）
講師　淑徳大学教授
森田　喜久男氏
出雲大社と日御碕
～日本遺産 日が沈む聖地出雲～
第2回　世界遺産
9月23日（月・祝）
東京証券会館ホール　定員300人
13：30~15：30（開場12：30）
講師　東京大学大学院准教授
岡　美穂子氏
世界史の中の石見銀
～石見銀山遺跡とその文化的景観～
開催予告
特別展
日本書紀成立1300年
出雲と大和
2020.1.15（水）—3.8（日）
TNM 東京国立博物館 平成館（上野公園）
TOKYO NATIONAL MUSEUM (UENO PARK)
御取納丁銀
（島根県立古代出雲歴史博物館　蔵）
ティセラ「日本図」
（島根県立古代出雲歴史博物館　蔵）
主催/島根県教育委員会
共催/大田市教育委員会　出雲市日本遺産推進協議会　読売・日本テレビ文化センター
[お問い合わせ]　よみうりカルチャー島根の世界遺産・日本遺産特別講座事務局
TEL　03-3642-4301（平日10：00～17：30/土・日・祝日を除く）

令和２年度 石見銀山遺跡

関連講座 2

毛利元就が結ぶ
石見銀山と嚴島神社

第１部　石見銀山と毛利氏

第２部　嚴島神社と石見銀山

第３部　豊臣政権下の石見銀山

対　談　戦国大名毛利氏と石見銀山

【オンライン講座】

配信　受講者限定　中国新聞デジタル専用サイト
令和２年12月１日（火）～12月15日（火）

一般公開　島根県公式YouTubeしまねっこCH
令和３年２月15日（月）～

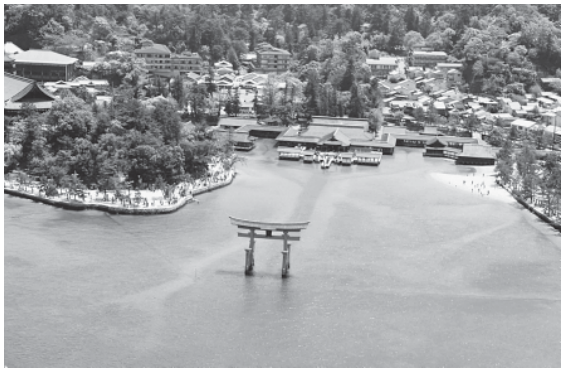
講座

毛利元就が結ぶ石見銀山と厳島神社

県立広島大学宮島学センター長 **秋山 伸隆** 氏

講演　第１部　石見銀山と毛利氏

○秋山氏　皆様こんにちは。県立広島大学宮島学センターの秋山伸隆でございます。本日は「毛利元就が結ぶ石見銀山と厳島神社」というテーマでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。お手元にございますレジュメ（45～52頁）に従ってお話を進めてまいります。まず「はじめに」の所をご覧ください。今日お話する内容は、中国地方の２つの世界遺産、ひとつは厳島神社、そしてもうひとつは石見銀山です。この２つの世界遺産には特に何の関係もないと思われているかもしれませんけれども、実は戦国大名毛利元就（もうりもとなり）を接点とする非常に深い結びつきがあります。その結びつきについて、今日はお話をしたいと思います。



「厳島神社」　提供：広島県

結びつきとはどういうことかと申しますと、例えば厳島神社の本社本殿、今私たちが厳島神社に参拝をして拝むところですが、あの奥に神様がお祀りされているところがございます。これを本殿と言いますけれども、この本殿は平安時代に平清盛が建てたものがそのまま残っているわけではなく、鎌倉時代に２度火災に遭い、そして戦国時代に毛利元就によって再建されたものです。その再建の際に“遷宮”という儀式が行われます。遷宮というのは新しくできた社殿に神様にお移りいただく、そういう儀式なんですけれども、その遷宮の儀式を行うために必要な費用が、実は石見銀山から出た銀で賄われております。さらに毛利元就の側近に平佐就之（ひらさなりゆき）という人物がおりますけれども、彼は石見銀山奉行、銀山からの収入・支出を管理する、そういう重要な役割を担っていたわけですけれども、この平佐就之が銀で作った小さな狛犬を厳島神社に奉納しています。その狛犬が現在も神社に伝えられています。

さらに銀山の外港として知られている温泉津（ゆのつ）という港がありますけれども、この温泉津の町を支配していた毛利氏の家臣達が４人連名で、厳島神社の舞楽の衣装を奉納しています。また厳島神社には石見銀山の住人たちがたくさん参詣をして、多額の寄付をしたことによって、棟札にその名前が記されております。このように厳島神社と石見銀山、中国山地を挟んで遠く離れているのですけれども、深い結びつきがあります。そのような結びつきについて今日はお話ししたいと思います。

それでは本題に入ってレジュメの１「石見銀山と毛利氏」についてお話しします。2007年に「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録された石見銀山は、戦国時代に開発されて当時は世界有数の銀鉱山でした。開発の当初から山口の大内氏が支配していたと考えられます。

石見銀山遺跡　「龍源寺間歩」

弘治元年の10月１日の厳島合戦で陶晴賢（すえはるかた）を破った毛利氏は、合戦後直ちに周防・長門へ侵

攻を始めますが、同時に吉川元春を中心に石見への進出を目指していました。一方中国地方の覇権を大内氏と争っていた尼子氏は、大内勢力の後退を好機と捉えて、やはり同じように石見への進出を図っていました。こうして石見国の国人たちは、大内方の益田氏を中心とするグループ、尼子氏と結びついた小笠原氏を中心とするグループ、そして毛利氏と結びついたグループに３分裂しました。親毛利グループの中には厳島合戦以前から陶晴賢と戦っていた津和野の吉見正頼、いち早く毛利方についた福屋氏、さらには厳島合戦後に毛利方に服属した佐波氏などの国人たちが含まれていました。

当時石見銀山の現地を支配していたのは、石見国の国人で刺賀長信という人物でした。毛利氏は遅くとも弘治２年の４月から５月ぐらいまでに、刺賀長信を服属させていました。ただし、当時元就は周防・長門を平定して大内氏を滅ぼすことを最優先の課題としておりましたから、石見国で戦火が拡大することはできれば避けたいと考えていました。そこで元春に対して「あまり石見で戦火が拡大しないように注意せよ」という書状を送っています。

これはレジュメで史料１（45頁、写真は54頁の資料３参照）としてあげたもので、県立広島大学が所蔵している文書です。弘治２年５月２日の元就の書状です。

これを見ますと「尼子氏や小笠原氏を刺激しないように。現地の事情に詳しい刺賀氏あるいは佐波氏などとよく相談をして慎重に行動するように」元春に注意しています。しかしこのような元就の思惑とは別に、尼子方は石見国への進出を強化していきます。そして石見国では元春を中心とする毛利方と、尼子方との攻防が続いていたわけですが、弘治２年９月３日までに尼子方が石見銀山を守る拠点である山吹城を攻略して銀山を奪いとってしまいました。城主の刺賀長信の家に伝えられた伝承によると、刺賀長信は城兵の命と引き換えに切腹をして城を明け渡したと伝えられています。

「山吹城跡」

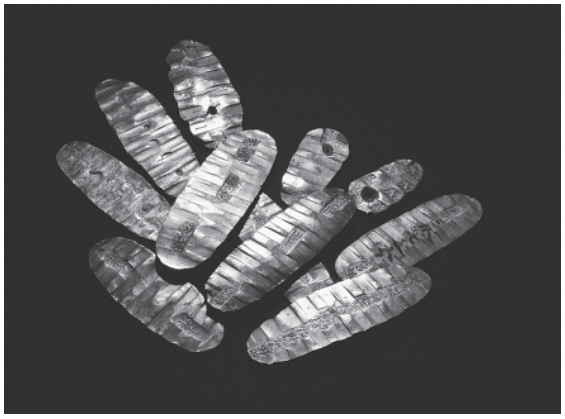
毛利氏が石見銀山を支配するようになるのは、もう少し後になってからで、まず永禄２年（1559）に尼子方についていた小笠原氏を降伏させます。これによって毛利氏は石見銀山のすぐ南から直接銀山を攻めることができるようになりました。尼子方として山吹城を守っていたのは、本城常光という武将です。これは毛利元就が享禄年間に滅ぼした、安芸国と石見国にまたがって広大な領域を支配していた高橋氏という有力な武士の一族でした。この本城常光は、永禄５年６月頃に毛利側の働きかけに応じて毛利氏に降伏し、結果的に毛利氏は石見銀山を奪回することに成功しました。その直後に毛利氏は本城常光とその一族を、出雲国の宍道で殺害しました。石見銀山に元就が非常に強いこだわりを持っていたことをよく示す出来事です。

毛利氏は永禄５年、石見国から尼子方の勢力を完全に駆逐して、石見国一国全体を支配することになりました。以後慶長５年（1600）の関ヶ原の戦いまで、石見銀山は一貫して毛利氏が支配していました。関ヶ原の合戦の後、徳川家康が最初に押さえたのは広島城ではなく、実は石見銀山です。戦国大名や統一権力にとって石見銀山がいかに重要な場所であるかを示す、よい証拠だと思います。

毛利氏は石見銀山を支配するようになると、銀山を天皇と室町幕府の将軍に献上して、自分は代官として銀山を支配することにしました。これはもちろん銀山を支配する名分を得ることが目的と考えられますが、これ以後実際に朝廷

に毎年銀を50枚、あるいは100枚献上していたことが、天皇に仕える女官の日記である「御湯殿上日記」という記録の中に記されております。

次に、石見銀山が戦国大名毛利氏の財政にとってどれほど重要な意味を持っていたかについてお話ししたいと思います。毛利輝元がある時、もし銀山に何か異変が起こったら「弓矢も成申間敷候」、毛利氏は戦争を遂行することができなくなる、このように語っている書状が吉川家文書の中に残っております。銀山は毛利氏の財政にとって文字通り死活的な意味を持つ財源となっていました。



「丁銀集合」 島根県立古代出雲歴史博物館蔵

銀山を手に入れた元就は、「銀山からの収入は全て戦費、軍事費に当てると定めた」と言われております。レジュメの史料２（46頁）は吉川元春と小早川隆景、福原貞俊、口羽通良という事実上の毛利氏の最高指導部を構成していた４人が輝元に出した連署状です。「銀山からの収入は御弓矢にだけ用いるように。銀山や温泉津に関連する課税を免除してほしいという要請があっても一切認めてはならない。」このような事を「御四人」が輝元に言上し、輝元も受け入れています。

戦国大名が金山や銀山を非常に重要視したということはよく言われますが、実際に１年間に例えば金山なり銀山なりからどれほどの収入があったかということを確実に示す史料は、実はそれほど残っているわけではありません。石見銀山の場合は幸いなことに史料が残っております。まず天正９年（1581）の「銀山納所高辻」という文書が毛利家文書に残っています。ここには銀山からの収入を事細かく記載されています。それを見ますと、銀山からは１カ月に銭にして2,756貫、１年間で33,000貫の銭が収入として入ってくる。納められる銀の重さは115貫752匁だと書いてあります。銀の板は１枚が43匁です。160ｇぐらいでしょうか。この銀の板に加工して2,692枚です。さらにこれ以外に「山役分」という収入があって、それを加えると全部で3,652枚の銀の板が毎年銀山から毛利家に納められることになります。

この銀が現在の貨幣価値にするとどれくらいなのか、という質問をよく受けるのですが、残念ながら銀の価値というものは戦国時代と現在とでは違っております。例えば現在銀の地金が１ｇあたりいくらで取り引きされているか、というようなことで計算してみると、大体３億5000万円ぐらいになります。ただしこれは現在の銀の価値からくる換算です。別の換算、これは銭１貫文が現在の10万円に相当するとよくテレビ番組などでは紹介されますが、この数字で換算すると銀山からの収入は30億円ぐらいになります。正確に現在の貨幣価値に置き換えることはできませんが、銀山からの収入が戦国大名毛利氏にとって実に大きなものであった、ということは間違いないと思います。

さらに豊臣政権期になりますと、銀山からの銀の採掘量は急増して、関ヶ原合戦のあった慶長５年には、銀山から銀の板が23,000枚納められる予定であったと記されています。これはあくまでも請負額ですので、実際にこれだけの銀の板が納められたわけではありませんが、これは先ほど言った天正９年の銀と銭の換算率で計算すると、銭にして28万貫に相当します。銭１貫というのは米１石に相当するとも言われますので、その比率で比較すると銀山からの収入は28万石ぐらいになります。毛利氏が直接支配している直轄領（蔵入地）は、同じ時期に約11万

石であることが分かっていますから、石見銀山の収入は毛利氏のすべての直轄領（蔵入地）から入ってくる年貢の収入の2.5倍以上あったということがわかります。

では、その銀を毛利氏はどのように使ったのでしょうか。「人数兵粮玉薬」という言葉が戦国時代の史料の中によく出てまいります。人数はもちろん兵力です。兵粮（兵糧）は兵士たちに食べさせる食料です。玉薬というのは鉄砲の弾薬です。この３つが戦国時代の合戦の勝敗を左右する、と言われているわけです。特に長期化、大規模化した戦国の合戦では、１万人を超えるような兵力を動員します。そうしますと大量の兵糧が必要になります。兵士１人に１日５合の米が支給されるのが原則でした。１万人の軍勢だとすると、１日で50石、１カ月30日で1,500石の米が必要になります。当時の米俵というのは１俵に３斗の米が入りますので、３斗の米俵で5,000俵が、１万人の軍勢の１カ月分の食料です。この5,000俵を馬の背中に乗せて運ぶとします。馬の背中の左右に２俵の米俵を積みます。2,500頭の馬が必要になります。今のサラブレッドの鼻の先からお尻までの長さは１馬身2.4mだそうです。前後の間隔を合わせて馬１頭について５mの間隔が必要だとすると、2,500頭の馬が並ぶと13㎞ぐらいになってしまいます。これではとてもじゃないけども兵糧を運搬するのは大変です。船があればいいのですが、船の便がないときは米の現物の代わりに銀を送ります。そしてその銀で、現地で米を買い入れて兵糧を調達するということが行われるわけです。

また玉薬、鉄砲の弾薬ですが、火薬の原料となるものは硝石と硫黄と黒炭が主なものです。硫黄と黒炭、黒炭は炭ですから、日本の国内で自給できますが、硝石というのは日本国内にはありませんから、外国から輸入することになります。外国から硝石を購入するためには、当時の国際通貨である銀で支払わなければなりません。毛利氏が尾道の豪商である渋谷氏に依頼して合わせ薬、調合された火薬のことですが、これを一斤、銀２匁４分から５分の価格で1,000斤でも2,000斤でも買って欲しいということを依頼している書状が残っています。

このように考えてくると、銀は戦国の合戦の勝敗を左右したものであるということがおわかり頂けると思います。毛利氏が織田信長の統一政権に辛くも対抗し得たのは、石見銀山の力であると言っても言い過ぎではないと思います。

講演　第２部　厳島神社と石見銀山

レジュメの２「厳島神社と石見銀山」の所から説明してまいります。厳島神社の本殿は、戦国時代の厳島神社の神職である棚守房顕（たなもりふさあき）が記した「房顕覚書（ふさあきおぼえがき）」によりますと、永禄11年（1568）に謀叛の疑いをかけられた備後国の有力武士である和智誠春（わちさねはる）と柚谷元家（ゆたにもといえ）の兄弟と家臣１人が、監禁されていた厳島のお寺から抜け出して厳島神社の「社頭」に走り込んでしまいました。おそらく本社本殿、神様がいらっしゃる厳島神社の一番大切な建物に逃げ込んだと考えられます。そこでやむなく閉門して年末年始の神事祭礼も一切行うことができませんでした。とうとう翌年の正月24日に毛利氏は「社頭」に踏み込んで３人を討ち果たします。この事件を受けて「社頭」が汚れたということで、元就は本社本殿を建て替えることにしたわけです。建て替えの工事が終わって神様に新しい社殿に入っていただく、遷宮の儀式が行われます。京都からわざわざ吉田兼右（かねみぎ）という人物を招いて遷宮の儀式を執り行ったわけですが、遷宮の毛利側の責任者であった桂元重は厳島神社に対して、この度の遷宮に必要な費用は石見銀山から支出するということを伝えています。実際に11月11日に銀の板が181枚と25匁６分、重さにしますと７貫765匁あまりになりますが、銀が桂元重と平佐就之から神社側に引き渡されています。この実務を担当した平佐就之が、実は石見銀山を管理する銀山奉行であったと考えられます。平佐就之は名前の一字に“就”という字が付いている

ことからわかるように、毛利元就に仕えていた家臣です。まだ元就が毛利家を相続する前から、父親の代から元就に仕えていましたから、元就が最も信頼する家臣のひとりでした。元就は銀山を領有するようになった当初から、銀山からの収入と支出を管理する役割をこの平佐就之に任せていたと考えられます。実際に銀山の現地に駐在している代官ではなく、吉田の郡山城にいて、倉に納められた銀の支出あるいは収入を管理する、そういう立場でした。この銀山奉行ですが、天正15年くらいから平佐就之に代わって林就長（なりなが）に引き継がれます。この林就長は、元々は九州の肥前国、現在の佐賀県の辺りから浪人として安芸国に流れ着いて、そして元就が彼の才能を見抜いて、元就の側近として抜擢された人物です。平佐就之、林就長、いずれも“就”の一字が付く、元就の家臣が銀山の支配の責任者となったわけです。さらにこの後は佐世元嘉（させもとよし）という毛利輝元の側近が、銀山奉行の地位に就きます。

銀山に佐毘売山神社があります。龍源寺間歩のすぐ近くに長い石段があって、石段を登っていくと大きな拝殿が見える、銀山の守り神として銀山の人々から崇拝されていた神社ですが、

「佐毘売山（さひめやま）神社」
提供：大田市教育委員会

この神社に伝わっている古文書の中には平佐就之、林就長、佐世元嘉にお正月のお祝いとして銀が送られてきたことに対する礼状が残っています。史料３（48頁、写真は55頁の資料４参照）は平佐就之の礼状です。

もうひとつご紹介したいのは、厳島神社に伝えられている銀製の狛犬です。これはレジュメの別添資料（53頁）として写真を掲載しておりますが、天正12年に平佐就之が厳島神社に寄進したものです。薄い銀の板を何枚か継ぎ合わせて作られています。中は空洞です。ある美術史の先生にこの写真を見ていただいたところ「珍品にして優品」と評されました。とても珍しい、つまり狛犬というのは木製・石製・青銅製であったり、陶磁器で作られたりすることが多いのですが、銀で作られた狛犬というのはほとんど例がないそうです。技巧的にもとても優れている、この写真を見ていただいても、とても可愛らしい。特に目の辺りがかわいくって、本当にこんな犬がいたら飼いたくなるような可愛らしさで、掌の上に乗るぐらいのサイズです。背中には寄進した平佐就之の名前や年月日が刻まれています。天正12年の６月17日という日付です。これは実は意味があります。厳島神社の最大の祭礼である管絃祭、これが開かれるのが旧暦の６月17日ですから、この日付に合わせて狛犬を寄進したと考えられます。作者の名前も刻まれておりまして、「山田木工助（もくのすけ）」が作ったとあります。これはおそらく宮島の対岸の廿日市で活動していた鋳物師の山田氏の一族ではないかと考えています。この銀を科学的に分析すれば、石見銀山から産出された銀を使っているということは間違いなく証明できるはずです。２つの世界遺産、厳島神社と石見銀山の結びつきを象徴するとても重要な作品で、国の重要文化財に指定してもいいのではないかと、個人的には考えております。

次に温泉津の奉行についてお話しします。温泉津は銀山から銀を積み出すとともに、銀山で必要とされる様々な物資を陸揚げする港でした。

「温泉津沖泊（ゆのつおきどまり）」（銀の積出港）

永禄５年に石見国を平定した毛利氏は、この温泉津の港を直轄領として温泉津関を置きました。港の入口に小高い丘があって、鵜丸城（うのまるじょう）と呼ばれる城跡がありますが、城を築いて温泉津奉行と呼ばれる家臣たちを在番させて、町と港を支配しました（図は55頁の資料５参照）。温泉津奉行に最初に任命されたのは、児玉就久（こだまなりひさ）と武安就安（たけやすなりやす）という２人であったことが分かっています。就久・就安という名前から分かる通り、元就の家臣です。そして元就あるいは元就の奉行人たちの指示を受けて温泉津の支配にあたりました。元就が、銀山とともに温泉津を大変重要視していたということが分かると思います。その温泉津の奉行たちが厳島神社に舞楽の衣装を寄進しているのです。「納曾利（なそり）」という舞楽を演じる時に着用する衣装で国の重要文化財に指定されています。厳島神社に伝わる舞楽は、左舞（左の舞）、そして右舞（右の舞）という２つに分かれています。左舞の方は中国由来の舞楽で、右舞の方は高麗、朝鮮由来の舞楽であると言われております。この舞楽の衣装は、背中の裏側、今の洋服でいえば襟の下のあたりに朱書きの文字が書かれています。その文字はレジュメで史料４（49頁）として紹介しています。「大旦那」毛利輝元の武運長久を祈って天正17年の正月に児玉美濃守、内藤出雲守、河内備後守、武安木工允（たけやすもくのじょう）の４人が寄進をしたということが書かれています。１字□になっていて読めていない文字がありますが、ここはおそらく“でん”、田という字が入るはずです。「田兵衛少尉」というのが右舞師です。そしてこの衣装には写真を見て頂いたらわかるとおり、家紋が３種類、全部で６カ所ですか、デザインされています。亀甲に唐花とか袍き茗荷、あるいは下り藤という家紋です。下り藤というのは内藤家の家紋ですが、残りの２つが寄進者の３名の家紋だと思われますが、残念ながらまだ誰の家紋なのかは特定できておりません。そしてこの４人が温泉津の奉行であるということを示す史料が、レジュメの史料５（49頁）です。これは現在安芸高田市歴史民俗博物館に所蔵されている文書ですが、元々は温泉津にあった中嶋家文書の１通だと考えられます。日付の下に「内出」「武木」、そして児童の「児」と「美」しいという字、さんずいの「河」と「備」とあります。これは内藤出雲守、武安木工允、児玉美濃守、河内備後守を表しています。天正18年、舞楽の装束が寄進された翌年です。寄進した４人が温泉津の奉行であるということをこの史料５が証明してくれるわけです。染織工芸が専門の先生にお聞きしたことがありますが、この装束は広島の辺りで作れるものではなくて、おそらく京都で誂えたものだろうとおっしゃっていました。かなり高級なものです。このような装束を寄進することができるということは、温泉津の奉行が相当資金を持っている。つまり温泉津という港がいかに栄えていたかということを示す証拠であろうと思います。温泉津にも実は厳島神社がございます。この厳島神社は元就を大檀那として温泉津の奉行である児玉就久と武安就安が造営したものだと伝えられています。

では、棟札についてお話したいと思います。かつて厳島神社の廻廊には多額の寄進をした人達の名前を記した「廻廊一間檀那」という棟札が掲げられていました。細長い板で上がちょっと三角に尖っている、この板に墨で文字が書いてあります。この棟札は、江戸時代の享保３年（1718）に廻廊に掲げられていた棟札を一枚一枚、文字を読み取っていった記録が、大願寺文

温泉津の「厳島神社」
提供：大田市教育委員会

書として伝えられております。114枚の棟札が記録されていますが、その中には石見銀山の住人による寄進が23枚あります。全体の1/5です。もちろん安芸国の寄進が多いのですけれども、石見銀山から寄進した人達の名前が棟札の1/5を占めているということです。レジュメに表の１（49～50頁）としてその名前を記しました。例えば、ゴシック体にしている９、11、16、17、23というのは皆同じ人が寄進している棟札です。銀山の昆布山（小符山）という所に住んでいる青木大蔵丞あるいは河内守宗久という人物で、天正15年から20年まで毎年のように９月に参拝をしていることがわかります。石見銀山の住人たちが厳島神社を深く信仰していたということが分かる資料であろうと思います。この廻廊の棟札は先ほど写しが残っていると言いましたけれども、現物が20枚ぐらい厳島神社に今保存されています。厳島神社の廻廊は国宝ですので、廻廊に掲げられたこれらの棟札は、国宝の附と呼ばれて、いわゆる付属品として国宝に指定されています。表の３番目、湯原余左衛門尉の棟札の現物が今も神社に伝えられております。

講演　第３部　豊臣政権下の石見銀山

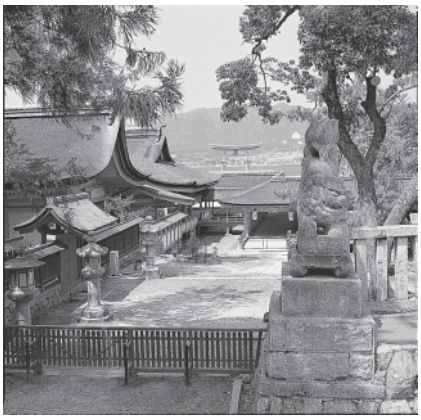
それでは、３「豊臣政権下の石見銀山」というところに入ってまいります。豊臣政権下になって、石見銀山が誰によって支配されていたのかという問題については、通説的な理解としては、豊臣政権の直轄領であるという説が、高等学校の日本史の教科書などにも記されております。これに対して、石見銀山が世界遺産に登録された前後ぐらいから、豊臣毛利共同管理説という考え方が主張されるようにもなりました。ただ最も早くから石見銀山についての研究を発表された小葉田淳先生、京都大学文学部の教授であった先生ですが、小葉田先生の「石見銀山―江戸初期にいたる―」という戦前に発表された論文を読むと、秀吉の直轄領であった生野銀山（兵庫県）とは異なって、石見銀山は毛利氏が支配して秀吉には運上を納めただけである、と説明されています。つまり石見銀山は豊臣政権下においても、毛利氏が領有していたと小葉田先生はお考えになっています。私も小葉田先生がおっしゃる通りだろうと思います。なぜそのように考えるかと申しますと、毛利氏領国の銀山というのは実は石見銀山だけではなくて、主に山陰方面にいくつかの銀山がありました。そこで石見銀山と石見銀山以外の銀山を区別して、毛利氏が秀吉に運上を納めたのは石見銀山以外の銀山でした。秀吉が、今私たちが石見銀山と呼んでいる銀山から運上を直接集めたということを示す史料は全くありません。このことは山川出版社から2003年に刊行された『中国地域と対外関係』という本の中の論文で発表していることです。この論文の最後に、石見銀山を含む銀山領有権をめぐる毛利氏と豊臣政権の交渉がどのように決着したのか、改めて検討したいと考える、と自分で課題として残しておりました。これについて答える機会がありました。2009年に龍谷大学史学会で講演を依頼されました。岸田裕之先生が広島大学を定年で退職された後、龍谷大学にお勤めでした。学生たちに話して欲しいというご依頼があったので京都に出かけまして、「豊臣期における石見銀山支配」というテーマでお話をしました。『龍谷史壇』という雑誌の132号に発表しております。

ここで私はどのようなことを言っているかと申しますと、『毛利家文庫目録第５分冊』とい

う目録の中に収められている史料として、佐世元嘉宛書状（銀山落着其他の事）（後文欠）、後ろが欠けている、年代としては（天正年カ）と目録に記されている文書があります。『広島県史古代中世資料編Ⅴ』にはこの史料は入りませんでした。活字化されたのは2004年の『山口県史史料編中世３』が最初だと思います。レジュメで史料６（51頁）として原文と現代語訳を紹介しました。この史料は、後ろが欠けていますので、誰か出したものなのか、そして何年何月何日に出されたものかも分かりません。ただ私はこの手紙を書いたのは、平佐就之の後、銀山奉行になった林就長ではないかと想像しています。宛名の佐世元嘉は毛利輝元の側近ですから、これは佐世宛てにはなっていますが、実質的には輝元に読んでもらうための書状ということです。ちょっと長い書状で意味が取りにくいので、現代語訳の方をご覧いただきながらお聴きいただければと思います。「柳沢元政が広島に下向するので、詳しくは彼から申し上げるでしょう。銀山のことはうまく落着しました。とてもめでたいことです」、と喜んでいます。「このようにうまくいったのは、どなたかが取り成していただいたからではありません。ただただ太閤様、秀吉様がお決めになったことです。秀吉様のご厚意に対して、言葉でも手紙でもお礼を申し上げることはできません。太閤様の思し召しを毛利家としてしっかり受け止めなければなりません。」このように書いた後で、「お礼の品はどれほどの「名物」を進上なさっても足りないでしょう。」このように書いています。この「名物」という言葉を覚えておいてください。そしてその次に、「もし諸国（毛利の領国）に豊臣家の役人たちが入り込んで、例によって無茶苦茶を言ったら、辺りの百姓や町人たちが驚いて、国中が混乱してしまうところでした。もしそのようなことになったら、豊臣家の役人たちと毛利の家臣が対決をしなければならない、争わなければならないというような事態も予想されるところでした。秀吉、上様のご厚意に対しては本当にどうお礼を申し上げてよいか分からないほどです。」銀山がうまく落着したということと、それが全て秀吉の裁定であるということをこの書状は強調しています。さらに、「この度浅野長政殿がとても好意的に取り計らっていただきました。もしも浅野殿が色々難しいことを言われたら、いつまでも銀山の問題は落着しなかったでしょう。」このようなことを書いています。残念ながらこの後がないのですが、内容的にはもうこれだけで十分だろうと思います。銀山の支配をめぐって交渉が落着をしたということですが、落着した結果を示すと思われるのが、次の秀吉の朱印状２通、レジュメの史料７と史料８（51～52頁）です。詳しいことは、説明は省略しますけれども、例えば史料７の方を見ていただくと、「其の方分領中石見国の先の銀山の外所々の分」、毛利の領国のうちの先の銀山というのが、私たちが今石見銀山と呼んでいる銀山のことです。それ以外にその他に所々にあちこちに銀山があるということです。史料８を見ると、「其の方分国中、出来之銀子山」、出来というのは新たに開発された、新たに発見されたという意味です。つまり石見銀山以外に新たに発見された、開発された銀山から銀が豊臣側に納められる、ということを書いているわけです。そしてその運上を納める役目を仰せ付けられたのが、史料７（51頁）の１行目に出てきます、林肥前守就長（はやしひぜんのかみなりなが）と柳沢監物元政（やなぎさわけんもつもとまさ）、彼ら２人が銀を集めて秀吉に運上を納める、ということになったわけです。つまり豊臣政権の役人が、毛利氏の領国に入って銀を取り立てるというようなことは回避された、ということを示しています。これが秀吉の裁定であったということです。これはもう毛利家にとっては本当に大歓迎です。100％というか100％以上の裁定でしょう。このような裁定が下されるとはおそらく毛利側も思っていなかった、その驚きあるいは喜びがこの書状からはよく伝わってきます。これによって豊臣政権下においても、石見銀山は毛利氏が直接領有す

ることができたということです。

先ほど言いました、お礼としてどんな「名物」を差し上げても足りないほどだというその「名物」とは何でしょうか？もみじまんじゅうではありません。この「名物」とは何かを考える上でヒントになる史料が、実は厳島神社の文書の中に残されているのです。レジュメの史料９（52頁）をご覧ください。６月５日という日付で、毛利輝元が棚守左近大夫（たなもりさこんのたいふ）、棚守元行（たなもりもとゆき）という厳島神社の神官に宛てた手紙です。「淀御誕生に就き、俄かに上洛せしめ候。」豊臣秀吉の妻である淀君が子供を産んだので、輝元は急いで上洛してお祝いを述べることになったと、この手紙に書いているわけです。最初読んだ時に私は、これは豊臣秀頼のことかと思いました。ただ豊臣秀頼が生まれたのは文禄２年の８月３日ですから、この輝元の書状、６月５日という日付と合いません。となると誰かということなんですが、これはおそらく秀頼より先に生まれてすぐに亡くなってしまった、鶴松と呼ばれる秀吉の子供であろうと思います。鶴松は天正17年の５月27日に生まれていますから、ちょうど日付がぴったり合います。５月27日に生まれたという知らせが広島に６月５日頃に届いて、輝元は、これは大変だ、急いで上洛しなければならない、とこの手紙を厳島神社の神官に送ったわけです。



「厳島神社」　提供：広島県

何のために厳島神社の神官に手紙を送るのかということなんですけれども、「俄かに上洛せしめ候」の次です。「然れば進物之太刀刀之事、通例之物は相成らず候、宝蔵之御物少々申し請くべく候。」秀吉の待望の男の子が生まれたわけですから、普通のお祝いの品ではとてもじゃないけど足りない。これは厳島神社の宝物を納めている蔵に入っている名刀を秀吉に贈るしかない。したがって宝蔵の中に納めてある太刀、刀を５本ほど吉田に持って来て欲しい。その中で一番いいものを自分が選んで秀吉にお祝いとして届けるからと、そういうことです。もう一通書状といいますかメモがついておりまして、それを見ますと「荒波」とか「菊一文字」、こういった刀を輝元が神社側に要請しているということがわかります。これらの刀は大内氏が厳島神社に奉納した刀で、名刀として知られている刀です。室町幕府の将軍が見せてほしいと言っても厳島神社側は、神様のお考えをくじで聞いたら駄目だという返事でした、というような言い訳をしながら大切にしてきた刀です。その刀を輝元は差し出してほしいと、このように言っているわけです。私は文禄３年に石見銀山を巡る交渉が落着した時に「名物」を送らなければならないと言っている「名物」は、やはり厳島神社の宝蔵に収められている太刀、刀だったのではないかと考えています。厳島神社にあったはずの戦国時代まであった名刀は、現在行方が分からなくなっているものがいくつかあります。豊臣秀吉とか石田三成とかあるいは徳川家康とか、そういった豊臣政権下の権力者、有力者たちに、毛利輝元が贈り物として送ったことによって、現在神社には伝わっていない、その所在が分からなくなっている刀ということです。もちろん文禄３年、石見銀山に関連して厳島神社の刀が送られたということを直接示す証拠は、残念ながらまだ見つかっていませんが、おそらくそうではないだろうかと私は想像しています。そのように考えてみると、これまでいくつもの例を挙げてお話してきた、厳島神社と石見銀山との深い繋がり、あるいは思いがけない繋がりというものが、さらによく理解し

ていただけるのではないかと考えている次第です。

今日はオンラインセミナー「島根の世界遺産講座」ということで、毛利元就が結ぶ石見銀山と厳島神社、２つの世界遺産の繋がりについてお話いたしました。どうもありがとうございました。

講演収録中の秋山伸隆氏

対談　戦国大名毛利氏と石見銀山

対談者

秋山伸隆氏

伊藤大貴（島根県教育委員会文化財課世界遺産室研究員）

○伊藤　皆さんこんにちは。私は島根県教育委員会文化財課の伊藤と申します。今回講座と合わせまして「戦国大名毛利氏と石見銀山」をテーマに、長年毛利氏を研究されてこられました秋山先生から、お話をお伺いすることとなりました。それでは先生、引き続きどうぞ宜しくお願い致します。

○秋山　宜しくお願い致します。

○伊藤　早速、最初の質問ですが、先生は石見銀山には何回かお越しになったことはありますでしょうか？

○秋山　何度か参りました。最初にお邪魔したのは1997年の９月で、科学研究費の共同研究グループの調査で銀山に参りました。この年は、実は大河ドラマの毛利元就が放映された年でもありまして、大河ドラマに合わせて中国地方の各地で歴史リレーフォーラムという講演会が企画されました。８月17日に温泉津で講演会があって、その温泉津で「毛利氏と銀山・温泉津支配」というお話をさせていただきました。科研の研究成果は『中国地域と対外関係』という広島大学にいらっしゃった岸田先生の編で本にまとめられていますが、この本に書いた研究を始めたのがちょうどこの頃でした。今考えてみると、沢山の偶然が重なったと思うんですが、今日お話しした例えば銀製の狛犬、これを私が初めて見たのもこの年でした。広島城で大河ドラマに合わせて企画展が開かれて、あの狛犬が出て、もうあまりの可愛さと平佐就之と石見銀山のつながりを示す証拠がはっきり見つかったということで、長い時間食い入るように見ていたら、会場の警備員の方が何か警戒されていたというのをよく覚えています。その前の年1996年は厳島神社が世界遺産に登録された年で、NHKの広島放送局で「ハイビジョンセミナー厳島神社」というセミナーが月に一度ぐらいのペースで開催されて、10月29日に「毛利元就をはじめとする戦国大名と厳島神社」という会に私も出席をして、染織工芸がご専門の切畑健先生とパネリストとして一緒になって、先ほどお話しした納曾利の装束の背中に朱書きがあるということを、初めて知りました。これはもう温泉津の奉行だということで、とても喜びました。安芸高田市、当時は吉田町でしたが、歴史民俗資料館が購入した文書が中嶋家文書の中の

対談中の秋山伸隆氏

一通で、これが温泉津の奉行の連署状でした。本当に一年足らずの間に銀山・温泉津・厳島神社・毛利氏に関わる新しい資料や新しい事実に次々と巡り会うことができて、私の石見銀山の研究がスタートしたというのは本当にラッキーだったと、今思い返しております。

○伊藤　ありがとうございます。改めてお伺いしたいのが、非常に大量の銀を毛利氏が手に入れているということであります。銀山からの収入がすべて戦費に当てられるという財政上重要なお話がございますが、豊臣期になるともっと銀の採掘量が急増していて収入も増えていくということでありまして、天正９年の段階で山役分も含めて3650枚ぐらいだったものが、豊臣期になりますと今度は23000枚の請負というふうになっているわけでありまして、相当増えているんですね。これは単純に銀の採掘量が増えたのだけではなくて、何かその背景とかというものはあるのでしょうか？

○秋山　私は古文書のほうから研究をしているので、技術的な面はよくわからないのですが、鉱山というのはおそらく素人が掘っても鉱脈を見つけることはほとんど不可能に近い。山師と呼ばれる鉱山経営の専門家の力を最大限活用して、毛利氏が銀山からの収入の拡大を図ったのかなと思います。請負ですから、請負額以上の採掘が行われれば、経営者側の収入になります。そういう仕組み、システムをどこかの時点で採用したことによって、採掘量が急激に上昇していったのではないかと思います。全く古文書を研究している側からの思いつきに過ぎませんから、技術史的な観点からどうなるのかということとはつながらないとは思いますけど、今のご質問に対してはそのようなことを今考えています。

○伊藤　続いて第２部について質問させてください。今回、先生の資料に厳島神社回廊の棟札の話がございました。棟札に銀山の住人の名前がたくさん載っているというお話で非常に興味深いんですが、これは毛利氏だけではなくて銀山に住んでいた人たちもこのような富裕層がたくさん存在したということなんでしょうか？

対談風景

○秋山　そうだと思います。話の中でも触れましたけれども、銀山の現地には山の神、佐毘売山神社が銀山で暮らす人たちの守り神であったと思うのですが、銀の採掘というのはやはり人間の知識や努力を超えるような偶然と言うのでしょうか、まさに掘り当てるか掘り当てられないかということで運命が決まってしまうような仕事なのかなと思います。そういう中で厳島神社への信仰もあるいは芽生えてくるのかなと思います。中国地方・四国あるいは九州あるいは和泉の堺なども含めて、棟札を寄進した人たちはいろいろいるのですが、これだけたくさんの人が一カ所から集中して参詣しているというのは、実は石見銀山以外にはないのです。どういうきっかけがあったのか、あるいは厳島の神に彼らが何を求めているのかというのは、残念ながら文献では分かりませんけれども、やはり鉱山で働く人たちの心と何か結びつくものがあるのかなと想像しています。今、関連して思い出したのですけれども、奈良の東大寺大仏殿が戦火で焼け落ちて、再建をするための費用を集めようということで毛利氏にその領国の中で勧進、寄付集めをさせてほしいということを願い出た中で、どこで寄付集めをするかと言うと銀山で寄付を集めたいと申請している文書が、東大寺文書の中にあったと思います。おそらく中国地方で最大の都市あるいは最も多くの富が集

まっているところというふうに、奈良の東大寺のお坊さん達も考えるほどの繁栄ぶりだったのではないかなと今のお話を伺いながら思い出しました。

○伊藤　ありがとうございます。奈良の東大寺の話は私も気になっていまして、今回の講座は厳島神社のお話ですが、遠く離れている奈良の人々も石見銀山の持つその重要性、富というものをよく知っていて、そしてそれに注目をしていたということが今回先生のお話でよくわかったかと思います。

第３部は、豊臣政権下の石見銀山というテーマでお話をいただきました。豊臣政権の頃の銀山を誰が支配していたのか、というお話ですね。毛利氏は石見銀山については自分で管理することが許されたということで、太閤秀吉のご好意だというお話が出てきます。非常に優遇されているというのは、他の大名たちの銀山と別格の扱いになっているという理解でよろしいのでしょうか。

対談中の伊藤大貴研究員

○秋山　私は例えば上杉ですとか同じように金山・銀山を持っていた大名たちが、秀吉からどのような支配を受けていたのかということは全く勉強していないのでわからないのですが、石見銀山についていうと、最大級の優遇策ではないかと思っています。問題はなぜ秀吉は毛利氏に対してそのような決定を行ったのかということなのですが、これもまだ史料的にしっかり詰めた話ではないのですが、文禄２年に秀頼が生まれて、秀吉は秀頼に豊臣家の後を託すことになった時に、幼い秀頼にとって最大の脅威となるのは誰かと思う時、間違いなく家康のことを秀吉は考えたと思います。そうすると関東の家康に対して、西の毛利輝元を秀頼の後援者と言うのでしょうか、守護者と言うのでしょうか、そういう形でその豊臣家の将来を考えた上での決定だったのではないかと想像しています。ちょうど時期がこうぴったり合って、秀頼が誕生してから１年ぐらい経ってこのような決定が行われるということは、豊臣家の将来と石見銀山の領有問題とを絡めて、何が一番豊臣家の将来にとってプラスになるかということを考え抜いた秀吉の結論がこれだったのではないかと。収入だけのことを考えれば、銀山を取り上げて豊臣政権の直轄領にしたほうがいいとは思いますが、そういうこととは別のことを秀吉は考えていたのかなと。これも想像ですけど。

○伊藤　ありがとうございます。先生のお話を伺って、なぜ優遇されたのかという点がひとつ疑問として出てきたのですが、今、先生のお話にございましたような、豊臣家の将来の問題とも関わっていたのではないのかということですね、天下の行く末の話と石見銀山がもしかすると深く関わっていたのではないのかということで、非常にまた大きな話につながってくるのかなと今、お話を伺って思った次第です。石見銀山の問題については、銀がたくさん取れた、財政的に毛利氏を支えていました、海外とのつながりがありましたとか言われるわけですが、まだまだもっとこう銀山というのは色々な所と結びついているのではないかということが分かりました。まだまだ銀山の研究は今後もやっていかないといけないことが多いのかなと非常に痛感したところであります。

○秋山　私から申し上げると、本当に世界遺産に登録されて以来、島根県あるいは大田市が石見銀山の調査・研究あるいは史料の収集、あるいはこの度刊行された『中世大田石見銀山関係史料集』など、世界遺産をただ単に観光資源と

して捉えるだけではなく、地域の歴史あるいは文化を研究するフィールドとして世界遺産を位置付けて、調査や研究活動あるいは教育普及活動を推進されているということは、本当に意義深いことだと思っています。逆に我が身を振り返って、広島に厳島神社と原爆ドーム、二つの世界遺産が同時に登録されましたが、例えば今銀山の現地に作られているような石見銀山世界遺産センターのような組織を作って調査研究を継続されていること、これはむしろ広島が見習わなければならないことかな、と思っております。

○伊藤　ありがとうございます。今後の研究についてもおっしゃっていただきました。私どももまた引き続いて石見銀山についてはまだまだ分かっていないことが沢山ございますので、広く研究を進めていき、一般市民の皆さんを含めて還元をしていくことができればなと思っております。

　本日、オンラインセミナーという形で、先生にはお話をいただきまして、更にまた対談という形でお話を頂きました。今回の先生のお話では、毛利氏と厳島神社、そして石見銀山のつながりとその重要性が、改めて浮き彫りになったのではないかと思っております。今回動画という形でお送りすることになったわけですが、現地には今日先生のお話に出てきました文化遺産も沢山ございますので、是非新型コロナウイルス感染症の対策には十分お気をつけていただいた上で、現地にお出かけいただければ大変幸いに思います。秋山先生、本日はどうもありがとうございました。

○秋山　ありがとうございました。

資料１

レジュメ「令和２年度 島根の世界遺産講座」（2020年12月1日～12月15日オンライン配信）

毛利元就が結ぶ石見銀山と厳島神社

県立広島大学 宮島学センター　秋山　伸隆

はじめに

■ 講座の内容

・中国地方の二つの世界遺産、厳島神社（広島県廿日市市。1996年登録）と石見銀山（島根県大田市。2007年登録）には、何の関係もないように思われているが、実は戦国大名毛利元就を接点とする深い結びつきがある。

・たとえば、現在の厳島神社本社本殿（国宝）は元亀２年（1571）毛利元就によって建て替えられたものだが、その遷宮の費用は石見銀山の銀によって賄われた。

・また、厳島神社には、元就の側近で銀山の収入と支出を管理していた平佐就之（なりゆき）が寄進した銀製の狛犬、銀山の外港温泉津（ゆのつ）の奉行である毛利家臣４名が連名で寄進した舞楽の装束（重要文化財）、銀山の住人が「廻廊一間檀那」として寄付したことを示す棟札などが今も伝えられている。

・さらに、豊臣政権下で石見銀山の領有をめぐる交渉が決着した際、厳島神社に奉納されていた名刀が、毛利輝元によって豊臣秀吉への進物として贈られた可能性もある。

・この講座では、あまり知られていない、石見銀山と厳島神社の深い結びつきについてお話しする。

１　石見銀山と毛利氏

■ 石見銀山

・2007年「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産に登録された石見銀山は、戦国時代に開発され、当時は世界有数の銀鉱山であった。開発当初から大内氏が支配していた。

・弘治元年（1555）10月１日の厳島合戦で陶晴賢を破った毛利氏は、周防・長門に進攻するとともに、吉川元春を中心に石見への進出を目指した。一方、大内氏と覇権を争ってきた尼子氏も、大内勢力の後退を好機ととらえ、石見への勢力拡大を図った。

・結果として石見の国人は、益田・三隅氏などの大内方、小笠原・温泉氏などの尼子方、吉見・福屋・周布・佐波・出羽氏などの毛利方に三分裂していった。

・当時、石見銀山（以下、銀山という。）の現地を支配していたのは、刺賀郷（現在の大田市久手町刺鹿）を本拠とする石見国人であり、大内氏に属して銀山の山吹城に在番していた刺賀長信であった。

・毛利氏は遅くとも弘治２年（1556）５月までに刺賀長信を服属させていた。ただし、当時の元就は周防・長門平定を最優先課題としており、「雲州衆」＝尼子氏や「河本衆」＝小笠原氏を刺激して、石見で戦火が拡大することは回避するため、佐波・刺賀と協議するよう吉川元春・宍戸隆家に指示している。

【史料１】　弘治２年５月２日　毛利元就書状　（県立広島大学所蔵文書）

就彼一行之儀、方々給候、令承知候、委細又返事申候、勢衆催候而敵方へ其聞共あるへき事不可然候、又雲州衆・河本衆手当候ハて不可然候ハん儀を不存候、兎ニ角ニ佐越（佐波興連）・刺賀

（長信）と能々御密談肝要候、彼両人依存分可被相定候々々、猶各へ申候間、不能一二候、恐々謹言

五月二日　　元就（花押）

隆家（宍戸）

元春（吉川）御返報

・石見では元春を中心とする毛利方と尼子方との攻防が続いていたが、弘治２年（1556）９月３日までに尼子方が山吹城を攻略して銀山を奪取した（益田高友家文書）。刺賀家の家伝によれば、刺賀長信は、城兵の助命と引き換えに切腹して開城したと伝えられている。

■ 毛利氏の銀山支配

・毛利氏は永禄２年（1559）８月、尼子方の小笠原氏を降伏させ、銀山に南から直接迫ることができるようになった。永禄４年（1561）４月12日には銀山を攻撃し、町や「固屋」（こや：山吹城の麓の郭）を攻略したが、山吹城を攻め落とすことはできなかった。（大願寺文書315-2）

・このとき山吹城を守っていたのは、本城常光（毛利氏に滅ぼされた高橋氏の一族）や尼子方の番衆であった。本城常光は永禄５年（1562）６月頃毛利方に降伏し、毛利氏は銀山を奪回した。その後、本城常光一族は出雲の宍道（しんじ）で殺害された。

・毛利氏は、永禄５年（1562）６月までに石見から尼子方勢力を追放して石見を平定した（斎藤家文書）。以後、慶長５年（1600）の関ヶ原の戦まで毛利氏が銀山を支配した。

・永禄６年（1563）閏12月、毛利氏は銀山を天皇と将軍に献上した（常栄寺文書）。これは銀山支配のための「名分」を得ることが目的と考えられるが、「御湯殿上日記」には毛利氏から毎年銀50～100枚が献上された記事が見える。

■ 銀山と毛利氏の財政

・毛利輝元が、もし銀山に異変があれば、「弓矢も成申間敷候」＝戦争遂行は不可能になると語るほど（吉川家文書196）、銀山は毛利氏の財政にとって死活的な意味を持っていた。銀山を手に入れた元就は「銀山からの収入はすべて戦費に充てる」と定めたとされている。

【史料２】元亀２年（1571）６月26日吉川元春・小早川隆景・福原貞俊・口羽通良連署状

（毛利家文書840）

乍恐言上仕候、温泉・銀山御公領之事、此間洞春様（元就）如被仰付候、少茂自余之御用ニ不被仕、御弓矢之可被御用候、堀口・町屋敷・通役・送馬以下、誰々訴訟仕候共、不可御同心候、其上洞春様如御手次可被仰付事、真実之御法度にも可成候、

・天正９年（1581）７月５日の「銀山納所高辻」（毛利家文書346）によれば、銀山の１ケ月分の収入は銭2,756貫、１年間で銭33,072貫になる。納められる銀の重さは115貫752匁（１匁は3.75ｇ）、銀の板（１枚43匁＝161.25ｇ）にして2,692枚となる。銀１枚は銭12貫285文に相当する。

・この2,692枚に「山役分」960枚を加えた3,652枚（約590kg）が、銀山から毛利家に納められた。銭44,865貫に相当する。

・豊臣期になると銀の採掘量は急増し、銀山からの収入も大幅に増えた。慶長５年（1600）の場合、「銀山公用」は23,000枚で今井越中守・吉岡隼人・宗岡弥右衛門が請け負った（吉岡家文書）。銀23,000枚を、天正９年の銀と銭の換算率で計算すると、銭約28万貫に相当する。

・豊臣期の毛利氏の蔵入地（直轄領）の年貢高は約11万石（「八箇国御時代分限帳」）であるから、米

１石＝銭１貫で比較すると、銀山の収入は蔵入地の2.5倍以上となる。もちろんこれは正確な計算ではないが、毛利家の財政における銀山の重要性は容易に想像できる。

■「人数・兵粮・玉薬」と銀

・元就が「銀山からの収入はすべて戦費に充てる」と定めたことは前述したが、銀は実際にどのように使われたのだろうか。

・長期化・大規模化した戦国の合戦の勝敗を左右するのは、「人数」（兵力）、「兵粮」（兵糧）、「玉薬」（弾薬）であった。とくに「兵粮」と「玉薬」の調達のための原資として銀が重要な役割を果たした。

・「兵粮」は１人１日５合支給が原則である。１万人の軍勢だと１日で50石、１月で1,500石の米が必要となる。３斗入の米俵で5,000俵、馬の背に２俵乗せて運ぶとして2,500頭の馬が必要になる。前後の間隔も合わせて馬１頭につき５m必要とすると、兵糧輸送隊は先頭から最後尾まで約13㎞の長蛇の列となる

・船による輸送の便がない地域では、米の代わりに銀を送り、現地で米を調達（購入）する方法が採用された。例えば、鳥取城に在番する吉川経家のために、父経安は「御兵粮米銀子百枚四貫三百目」を送っている（石見吉川家文書150）。また備中の成羽（岡山県高梁市）に「うり米」があることを知った毛利輝元は、銀50枚を送って兵糧を調達するよう指示している（二宮家文書）

・鉄砲の火薬の原料となる硝石は国内にない。外国船から購入すると代金は銀で支払うことになる。毛利氏奉行人は、尾道の商人渋谷与右衛門尉に対して、「合薬」（調合された火薬）を１斤＝銀２匁４～５分の価格で1,000～2,000斤購入するよう依頼している（渋谷文書）。

・銀は戦国の合戦の勝敗を左右した。毛利氏が織田信長の統一政権にからくも対抗できたのは、銀山の力であると言っても過言ではない。

２　厳島神社と石見銀山

■ 厳島神社本社本殿

・戦国時代の厳島神社の神職棚守房顕が記した「房顕覚書」によれば、永禄11年（1568）謀叛の疑いをかけられて厳島の摂受坊に軟禁されていた和智誠春・柚谷元家兄弟と家臣１人が、12月16日「社頭」に走り込んだ。やむなく閉門し、年末年始の神事祭礼も停止したが、翌年正月24日、３人は「神前」で討ち果たされた。この事件を受けて、元就は「社頭」（本社本殿）を建て替えることにした。

■ 元亀２年（1571）の遷宮儀式とその費用

・本社本殿の建て替え工事が終わり、京都から吉田兼右を招いて遷宮の儀式が執り行われることになった。10月19日、遷宮奉行桂元重は、「此度入目之事、於銀山被仰付候間、急度可相調候」、この度の遷宮の費用は銀山の銀によって必ず賄われると言明している（桂文書所収厳島文書）。

・11月11日には銀181枚25匁6分（7貫765匁5分）が桂元重と平佐就之から神社側に渡された（桂文書所収厳島文書）。その実務を担当したのは平佐就之であった（厳島野坂文書1317）。

・銀は銭に換算すると2,588貫500文、当時の銀山の1年間の収入の1割程度を遷宮費用に支出したと推定される。戦費ではない遷宮費用に銀山の銀を支出したことは、元亀2年6月14日に亡くなった元就の遺志であろう。

■ 銀山奉行平佐就之

・遷宮費用支出の実務を担当した平佐就之は、元就の奉行人である。元就が家督を相続する前の少

年・青年時代を過ごした多治比（安芸高田市）の出身で、父親の代から元就の側に仕えていた。

・就之は元就の信任が厚く、毛利氏が銀山を領有するようになった当初から、銀山からの収入と支出を管理する任務（これを銀山奉行と仮称する。銀山の現地に駐在し、支配の実務を担当する代官ではない）を任されていたと考えられる。

・銀山奉行の任務は、天正15年（1587）頃から、晩年の元就がその才能を見い出して登用した林就長（肥前出身の浪人の子息）に引き継がれた。さらに慶長年間になると、輝元側近の佐世元嘉が担当した。

・銀山の佐毘売山（さひめやま）神社に伝わる古文書には、平佐就之、林就長、佐世元嘉が新年の祝儀として銀を送られたことに対する礼状が含まれている。３人が銀山奉行であったことを裏付ける証拠でもある。

【史料３】（年未詳）正月８日　平佐就之書状　（佐毘売山神社文書）

新春之御祝儀、誠珍重候、仍銀一包送給候、畏入候、猶高与三兵可申候、恐々謹言、

平藤右

正月八日　就之（花押）

山神

外記允殿　御報

■ 銀製狛犬

・厳島神社には天正12年（1584）平佐就之が寄進した狛犬が伝えられている。**【別添資料１】**薄目の銀の板数枚を接ぎ合わせて作られた作品で、ある美術史家は「珍品にして優品」と評された。成分を分析をすれば、石見銀山産出の銀であることが科学的に証明できるだろう。

・背面に平佐就之の寄進銘、尾の裏には「山田木工助作之」と作者名が刻まれている。**【別添資料２】**おそらく廿日市の鋳物師山田氏の一族であろう。６月17日という日付は、船管絃（現在の管絃祭）に合わせたものである。

・この狛犬は、厳島神社と石見銀山という二つの世界遺産の結びつきを象徴する重要な作品である。

■ 温泉津奉行

・温泉津（島根県大田市）は、銀を積み出すとともに銀山で必要とするさまざまな物資を陸揚げする港町で、戦国時代には山陰地方の重要な港の一つであった。

・永禄５年（1562）石見を平定した毛利氏は温泉津を直轄領として温泉津関を置き、港の入口の岬に鵜丸城を築き、「温泉津奉行」と呼ばれる家臣を在番させて、温泉津の町と港の支配にあたらせた。

・温泉津奉行は、はじめ児玉就久と武安就安の二人が配置された。就久・就安という実名からわかる通り、元就家臣である。元就あるいは元就奉行人の指示を受けて温泉津の支配にあたったと考えられる。元就が銀山とともに温泉津を重視していたことがわかる。

■「納曾利（なそり）」（松皮菱（まつかわびし） 繋（つなぎ） 文様（もんよう） 散（ちらし） 納曾利袍（なそりのほう）：重要文化財：丈137.0㎝、裄61.0㎝）

・厳島神社に伝わる舞楽（右舞）の代表的な曲である納曾利の装束である。後世の仕立て替えにより全体的に短縮され、童舞装束とされている。

・天正17年（1589）正月に厳島神社に奉納されたことが、背裏に朱筆で記されている。「大旦那」（毛利輝元）の武運長久を祈願し、児玉美濃守・内藤出雲守・河内備後守・武安木工允が寄進したことが記されている。□は「田」であろう。田氏は客人社棚守・右舞師を代々務めていた。

・亀甲に唐花、袍き茗荷、下り藤の丸紋が付いている。寄進者４名の家紋と思われる。

【史料４】納曾利装束背裏銘

厳島納曾利装束」奉寄進大旦那武運長久所」天正十七年正月吉日」児玉美濃守」内藤出雲守」河内備後守」武安木工允」右舞師□兵衛少尉景欽」

・寄進者４名は、天正18年（1590）８月28日の温泉津奉行人連署書状の「内出」（内藤出雲守）、「武木」（武安木工允）、「児美」（児玉美濃守）、「河備」（河内備後守）と完全に一致しており、当時の温泉津奉行であったことが確認できる。

【史料５】天正18年８月28日温泉津奉行人連署書状　　（安芸高田市歴史民俗博物館所蔵文書）

以上

小問甚五郎手前参拾弐匁堅催促付而、先自其方取替之由、神妙候、やかて各よりさいそく候て出させ可申候、為其捻遣候、恐々謹言、

内出（花押）
天十八　　武木（花押）
八月廿八日　　児美（花押）
河備（花押）

・この装束は、おそらく京都で誂えられたものであり、かなり高価な作品と推定されている。このよう装束を寄進した温泉津奉行の財力、つまりは温泉津の町の富裕さをしのばせる。
・温泉津小浜に厳島神社がある。棟札写によれば、永禄11年４月元就を大檀那として「奉行（児玉）就久・（武安）就安」が造営したものだとされている。

■ 廻廊棟札

・かつて厳島神社の廻廊には、多額の寄進をした者を「廻廊一間檀那」と記した棟札が掲げられていた。江戸時代の享保３年（1718）に作成された「厳島廻廊棟札写」（大願寺文書318）によって114枚の棟札の檀那の名が知られるが、銀山住人による寄進は23枚に及び（表１）、全体の５分の１を占める。
・たとえば銀山小符山住の青木大蔵丞（河内守）宗久は、天正15年から20年まで、毎年のように９月に参拝している（９・11・16・17・23）。石見銀山の住人と厳島神社の深いつながりがうかがえる。

表１　廻廊棟札写に見える銀山の住人（大願寺文書318号）

	年・月・日	檀　那　名
1	永禄11・９・吉	石州銀山住田辺対馬守治綱
2	天正２・９・吉	石州銀山大谷住栗栖内蔵助
3	**天正６・12・吉**	**石州銀山休住湯原余左衛門尉**
4	天正７・９・吉	石州銀山住奥源左衛門尉
5	天正10・２・吉	石州銀山住人三宅三郎左衛門
6	天正14・９・吉	石州銀山之住人諏訪三郎左衛門尉
7	天正15・９・吉	石州銀山之住連嶋大江三宅与左衛門尉
8	天正15・９・吉	石州銀山之住連嶋西浦之内有本孫兵衛尉

9	**天正15・９・吉**	**石州銀山小符山之住青木大蔵丞宗久**
10	天正16・９・吉	石州邇摩郡左間銀山内服部小七郎
11	**天正16・菊（9）・吉**	**石州銀山昆布山青木大蔵丞宗久**
12	天正16・菊（9）・吉	石州邇摩郡銀山昆布山住三宅弥三郎
13	天正17・９・吉	石州銀山住諏方兵蔵辰歳
14	天正17・９・吉祥	石州銀山之住三宅与右衛門巳歳
15	天正17・９・吉祥	石州銀山住栗栖与左衛門尉
16	**天正17・９・吉祥**	**石州銀山之住青木大蔵丞庚子歳**
17	**天正18・９・吉**	**石州銀山之住青木河内守宗久**
18	天正18・９・吉	石州銀山之住諏訪左近尉
19	天正19・９・吉	石州銀山住諏訪左近丞秋吉
20	天正19・９・吉	石州銀山之住小林源左衛門尉之久
21	天正19・９・吉祥	石州銀山住小林丹後守吉久
22	天正19・林鐘（6）・吉	石州銀山住三宅壱岐守藤原朝臣久重
23	**天正20・９・吉祥**	**石州銀山住青木河内守子歳宗久**

３　豊臣政権下の石見銀山

■ 豊臣政権下の銀山に関する研究史

(1) 豊臣政権「直轄領」説＝通説的な理解

(2) 豊臣・毛利「共同管理」説＝近年の理解

(3)「毛利氏領有」説＝小葉田淳氏の理解（「石見銀山―江戸初期にいたる―」『日本鉱山史の研究』所収、1968年、岩波書店。初出は1933年）

・小葉田淳氏は、秀吉の直轄領であった生野銀山（兵庫県）とは異なり、石見銀山は毛利氏が支配し、秀吉へは運上を納めただけであると明確に指摘されている。

■ 秋山の理解（「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」、岸田裕之編『中国地域と対外関係』所収、山川出版社、2003年）

・毛利氏領国の銀山は、①石見銀山と、②石見銀山以外の銀山に区別され、毛利氏が秀吉に運上を納めたのは、②の石見銀山以外の銀山からである。秀吉が①石見銀山から運上を徴収したことを直接的に示す史料はない。

・この論文の末尾で「石見銀山を含む銀山領有権をめぐる毛利氏と豊臣政権の交渉が、どのように決着したのか、あらためて検討したいと考える」と述べている。

■ 秀吉による「落着」

（秋山「豊臣期における石見銀山支配」『龍谷史壇』132号、2010年）

・1978年に発行された『毛利家文庫目録 第５分冊』（山口県文書館）は、毛利家に伝来した文書の内、未整理のまま伝えられてきた文書の一部を目録化したものである。そのなかに「佐世元嘉宛書状（銀山落着其外の事）（後文欠）（天正年ヵ）」とされている文書がある（５家臣35）。『広島県史 古代中世資料編Ⅴ』（1980年）に中世文書の一部が収録されたが、上記の書状は含まれていな

い。活字化されたのは『山口県史 史料編 中世３』（2004年）が最初である。

・後欠のため差出人や日付は不明である。差出人は、柳沢元政とともに豊臣政権側と交渉している林就長ではないかと推測する。宛所は佐世元嘉であるが、元嘉から毛利輝元に披露されることを想定して書かれている。原文はわかりにくいので現代語訳でも紹介する。

【史料６】（年月日未詳）某書状　（毛利家文庫　第５分冊５家臣35山口県文書館）

「佐与三左 まいる」（端裏ウワ書）

条々

柳新右下向候条、於趣者可被申上候、

一銀山之事、可然落着候之条、御外聞尤珍重候、

一如此落着候事、誰々御取成ニ而も無之候、ただただ太閤様御分別にて被仰出候事、不浅御心付中々言ニも書中ニも難申上候、然間此御礼物別而御申ツる、太閤様被思召候処を御請取候て可然候、御音物之事、何程名物なと御進上候而もあぎたらす候、諸国へ上衆入はまり、例之むさくさを申懸、あたり之百性商人以下驚候而申乱候ハヽ国中一乱まてニ候、左候而、検使衆此方対決なとと可在之事眼前之儀候処、上様御懇意更可申様無之候、

一今度浅弾（浅野長政）御入魂之儀、非大方候、色々六ケ敷被仰候ハヽ、はてさる可為御事候ニ、一篇ニ御馳走誠存之外之儀候、是又能々（後欠）

（現代語訳）

柳沢元政が（広島に）下向するので、詳しくは柳沢から申し上げるでしょう。銀山のことはうまく落着しました。（毛利家にとって）めでたいことです。

このように落着したのは、どなたかの取成によるものでありません。ただただ太閤様（秀吉）がお決めになったことです。そのご厚意に対して、言葉でも手紙でも申し上げることができません。太閤様の思し召しを（毛利家として）受け止めなければなりません。お礼の品はどれほどの「名物」を進上なさっても足りないでしょう。

諸国に豊臣家の役人が入り込み、例のむちゃくちゃを申し掛けると、あたりの百姓・町人などが驚いて国中が混乱します。そうなったら豊臣家の検使衆と毛利家側が対決するような事態も予想されるので、上様（秀吉）のご厚意に対してどう申し上げてよいかわかりません。

この度の浅野長政様の好意的な取り計らいは一方ならぬものでした。色々難しいことを仰せられたら、いつまでも決着しなかったでしょう。（毛利家の対する浅野長政の）ご尽力は思いもしないほどでした。（以下欠）

■ ２通の秀吉朱印状

・この書状からは、銀山の支配をめぐって毛利側と秀吉側で交渉が行われていたこと、最終的には秀吉の判断で毛利側にとって有利な裁定となったこと、交渉の過程で浅野長政が毛利側に協力したことなどが読み取れる。

・このことと関連すると思われるのが、年欠の２通の秀吉朱印状である。

【史料７】（文禄３年）正月18日　豊臣秀吉朱印状　（毛利家文書937）

其方分領中石見国先銀山之外所々之分銀子事、其方被申付林肥前守（就長）・柳沢監物（元政）両人ニ取集可運上候、猶浅野弾正少弼（長政）可申候也、

正月十八日　（秀吉朱印）

羽柴安芸宰相（毛利輝元）とのへ

【史料８】（文禄３年）４月25日　豊臣秀吉朱印状　（毛利家文書938）

其方分国中出来之銀子山運上儀、不相易奉行可被申付旨被仰出候処ニ、則為下代林・柳沢両人申付、御公用運上不可有由断旨、尤候、就其銀子参百枚到来、悦思召候、猶浅野弾正少弼可申候也、

卯月廿五日　（秀吉朱印）

羽柴安芸宰相（毛利輝元）とのへ

・毛利氏領国の銀山を石見銀山（「先銀山」）とその他の銀山に区別し、石見銀山は毛利氏が領有し、それ以外の銀山（「分国中出来之銀子山」）から「運上」を秀吉側に納めるという決定がなされたことが、秀吉による「落着」の内容であろう。
・秀吉朱印状を毛利氏に取り次いだのが浅野長政であること、「下代」に任命されたのが林就長・柳沢元政であることも、佐世元嘉宛の書状の「落着」と２通の朱印状が密接な連関を有するものであることを示している。
・運上を納める「下代」が豊臣政権側の役人ではなく、毛利家臣の林就長・柳沢元政とされたことも、「上衆」が毛利氏領国に「入はまる」事態を回避できることになったと毛利側に歓迎されているのである。
・「落着」とは、毛利氏が銀山を引き続き領有することが認められたことを意味する。銀山は豊臣期においても毛利氏が領有していたのである。

■「名物」とは何か？

・天正17年（1589）５月27日、淀君が男子（鶴松）を出産した。６月５日、毛利輝元は俄かに上洛して出産祝いの進物として太刀を贈ることにした。進物の太刀は「通例之物」ではなく、厳島神社の「宝蔵之御物」から選びたいとして「荒波」などの名刀５振の注文を添えて神社側に申し入れた（厳島野坂文書552・553）。
・文禄３年（1594）の銀山領有問題決着時の進物とされた「名物」も、やはり厳島神社の宝蔵の太刀ではないだろうか。厳島神社と石見銀山の思いがけないつながりは、ここでも認められる。

【史料９】天正17年６月５日　毛利輝元書状　（厳島野坂文書553）

就淀御　誕生、俄令上洛候、然者進物之太刀刀之事、通例之物不相成候、宝蔵之御物少々可申請候、先以可見合候之間、右注文之前早々被差越候者、肝要候、尚宍戸左馬助可申候、謹言

六月五日　（花押）（毛利輝元）

棚守左近大夫殿（元行）

レジュメ別添資料

島根の世界遺産講座「毛利元就が結ぶ石見銀山と嚴島神社」別添資料

【別添資料１】銀地狛犬（全身）

嚴島神社所蔵、広島県立歴史博物館図録『安芸吉川氏とその文化』34頁掲載写真を転用

【別添資料２】銀地狛犬（背面）

嚴島神社所蔵、広島県立歴史博物館図録『安芸吉川氏とその文化』34頁掲載写真を転用

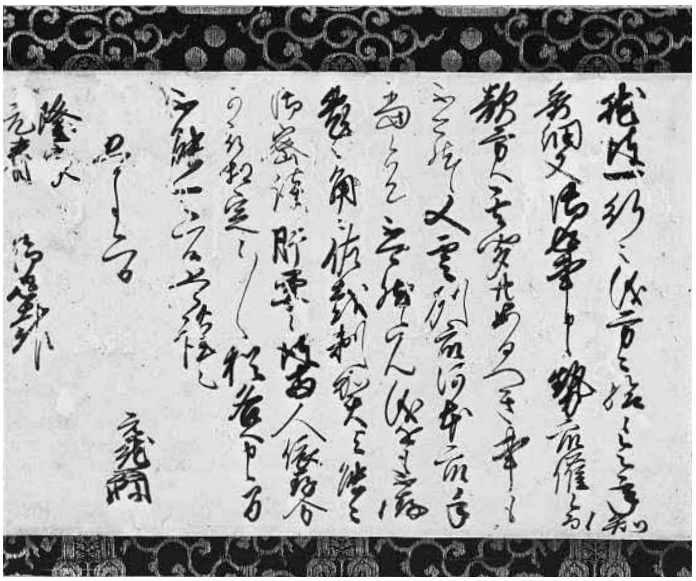
本書に掲載されているすべての内容の著作物は、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。
掲載内容の一部及びすべてを複製、転載または配布、印刷など第三者の利用に供することを禁止します。

資料２

毛利元就像

鰐淵寺蔵　提供：島根県立古代出雲歴史博物館

資料３



毛利元就書状　県立広島大学蔵

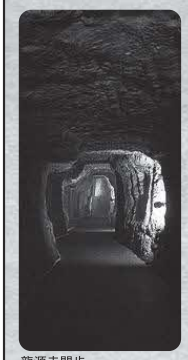
資料４

佐毘売山神社文書　石見銀山資料館寄託

資料５

温泉津　沖泊

新聞広告


龍源寺間歩

丁銀集合（島根県立古代出雲歴史博物館蔵）

平佐就之書状（個人蔵・石見銀山資料館寄託）

嚴島神社（写真提供 広島県）

毛利元就像（鰐淵寺蔵・写真提供 島根県立古代出雲歴史博物館）

オンラインセミナー
島根の世界遺産講座

中国地方の二つの世界遺産、嚴島神社（宮島）と石見銀山。毛利元就を接点とする深い結びつきについて、その歴史を掘り下げ魅力に迫ります。

視聴ページ公開（動画配信）期間

2020年
12月1日㊋13：00
～15日㊋17：00

視聴無料
要申し込み

動画には字幕が入ります

講演 毛利元就が結ぶ
石見銀山と嚴島神社（60分）

講師／県立広島大学宮島学センター長
秋山 伸隆氏

1953年鳥取県生まれ。広島大学文学部・同大学院で日本史を学ぶ。博士（文学）。同大学文学部助手、広島文化女子短期大学助教授、広島女子大学教授などを経て2005年4月より県立広島大学教授、18年3月定年退職。現在は名誉教授・宮島学センター特任教授。日本中世史、特に戦国大名毛利氏と中国地方の地域史を研究している。著書・論文「戦国大名毛利氏の研究」（吉川弘文館、1998年）、「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」（岸田裕之編「中国地域と対外関係」山川出版社、2003年）ほか。

対談 戦国大名毛利氏と石見銀山（15分）
対談者／秋山伸隆氏、伊藤大貴氏（島根県教育委員会文化財課世界遺産室研究員）

申し込み方法

ホームページ「中国新聞デジタル」のおでかけページにあるセミナー応募フォームか、メールに郵便番号、住所、名前、年齢、電話番号、メールアドレス、複数人が視聴する場合は申込者を除く参加者の名前を記入し送信。

申し込み締め切り／12月10日（木）

●メール
event2@c-kikaku.co.jp

●応募フォームはこちらから→
https://www.chugoku-np.co.jp/shimane-seminar/

※後日、セミナー視聴ページのURLをメールで送信し、資料などは郵送します。
※お預かりした個人情報は本講座における連絡だけに使用します。中国新聞企画サービスが責任を持って管理し、第三者には開示しません。

主催／島根県教育委員会　共催／大田市教育委員会、中国新聞社　問い合わせ／中国新聞企画サービス ☎082（236）2244 ※平日9：30～17：30

本書は、実際の講演・対談を編集し、掲載しています。本書に掲載されているすべての内容の著作権は、島根県教育委員会に帰属するか、島根県教育委員会が著作権者より許諾を得て使用しています。このため、島根県教育委員会及び著作権者からの許可無く、掲載内容の一部及び全てを複製、転載または配布、印刷など、第三者の利用に供することを禁止します。

令和元年度・２年度
石見銀山遺跡関連講座記録集

令和３年(2021年)３月

発行　島根県教育委員会(文化財課世界遺産室)
〒690-8502 島根県松江市殿町１番地
TEL 0852-22-5642

URL　https://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/

印刷　渡部印刷株式会社

表紙写真

【 左 】沖泊（おきどまり）
主に16世紀後半に銀の輸送や石見銀山への物資補給、軍事基地として機能した港

【中央】毛利元就像　鰐淵寺蔵・島根県立古代出雲歴史博物館提供

【 右 】フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザール（ドミニコ会士）のマニラ来航日本人への質問録と日本情報」スペイン国立歴史文書館蔵
AHN. DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9 “La mina de plata Iwami”
Ministerio de Cultura y Deporte. Archivo Histórico Nacional,
DIVERSOS-COLECCIONES,26,N.9
Archivo Histórico Nacional (Madrid)